ることから、一定の規格を強く意識して作られたものと推察される。

３類　資料数は13点で、口径が12.2ー14.4cm と幅がある。底径は7.0ー8.4cm、器高は2.4ー3.5cmと口径同様に幅がみられるが、形態的には特異なものは認められない。平均底径／口径比は２類に準じており、全体に２類を小型化したようなものである。

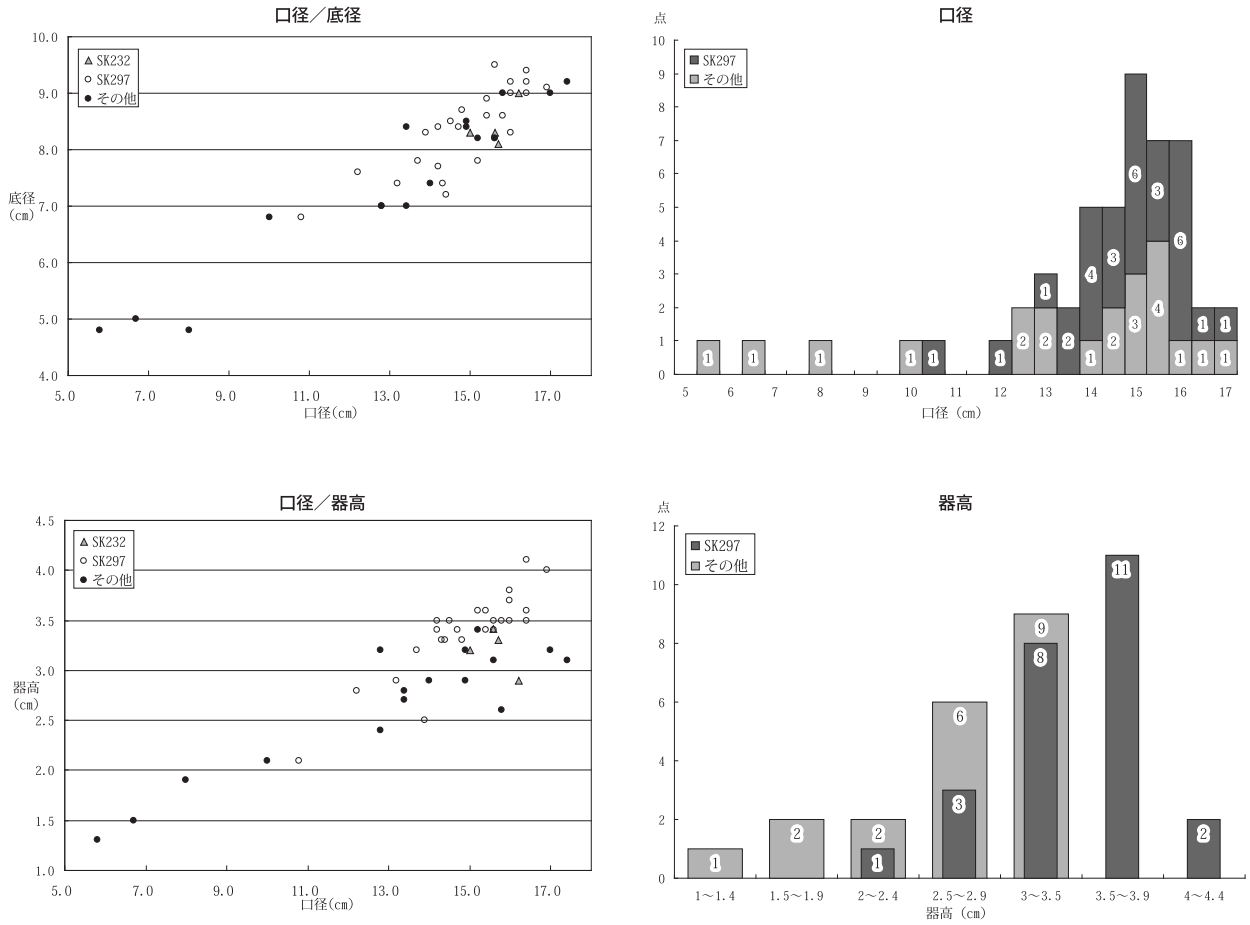
４類　資料数は３点で、口径が8.0ー10.8cmで、平均底径／口径比は0.63で１ー３類とは異なり体部の立ち上がりが急になる。底径は4.8 cmと6.8cm、器高は1.9cmと2.1cmである。形状は２点が直線的に立ち上がるものである。

５類　資料数は２点で、口径が5.8cmと6.7cmで、平均底径／口径比が0.78と口縁径に比べ底径が大きい。全体に器高が低い皿状となり、体部の立ち上がりが急で、大きさのみならず形状が１ー４類とは大きく異なっている。底径は4.8cmと5.0cm、器高は1.3cmと1.5cmである。資料数は少ないが規格性を意識させるもので、その用途については他類とは異なるものと考えられる。

法量分布

対象とする皿はＳＫ232とＳＫ297からの一括出土品が多くを占めることから、以下ではこれら土坑出土品とその他に分けてみることとする。

全体に口径は12ー17cm程度の１ー３類が量的にまとまりをもち、中でも15cm前後のものが最も多い。ＳＫ232出土品は口径15ー16cmの大型の１・２類が多いのに対し、ＳＫ297出土品３類の中型のものも含んでいる。口径と器高の関係をみると、ＳＫ232出土品は若干扁平気味であるのに対し、ＳＫ297ではその他遺構出土品の平均より器高が高く、特に１・２類に顕著で、高さが3.5cm以上のものはＳＫ297のもので占められている。以上のことからＳＫ



第331図　土師質土器皿の遺構別法量分布

297とそれ以外のものとの間には口径と底径の比率に大差が無く、さらにＳＫ297は他より器高が高く、その形状は碗状に近いものとなっている。ＳＫ297出土品には煤が付着したものが皆無なことから、その用途については灯明具とは別に食膳具や供膳具等の用途に使用された皿と考えられ、またＳＫ232出土品においては若林城における灯明皿としての特徴を示すものといえる。

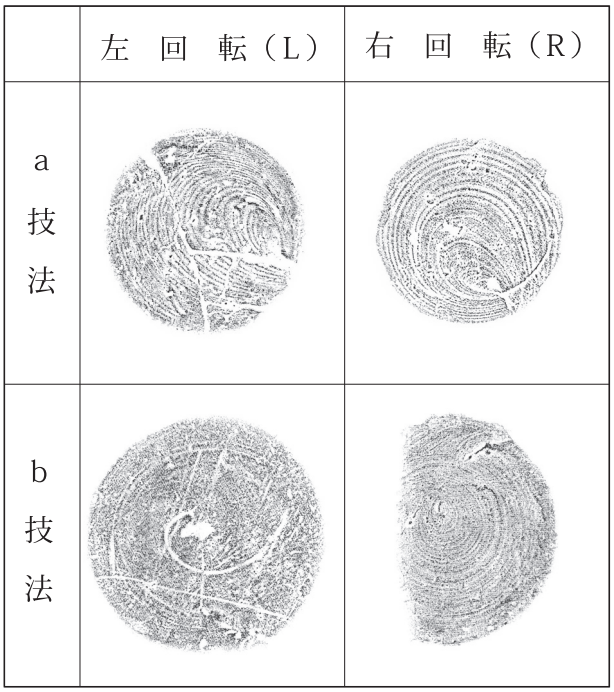
胎土の色調

色調は全体の大きさや形状に対してある程度の関係が認められる。胎土は全般に褐色粒を少し含むが緻密で、Ｘ113のように砂粒を多く含むものもある。胎土が橙色を呈するものの焼成は良好であり、器厚は薄手で体部が扁平なものが多い。これには１・２・４類となるＸ６ー８・31・32・42ー45・125があり、ＳＫ232出土のものは全てこの類である。胎土が黄橙色のものは焼成が硬質で、調整では見込みに渦巻状のナデが顕著なものが多く、これには１ー３類となるＸ68・69・71・72・74・75・84・87・91がある。また胎土が灰色味のある浅黄橙色を呈するものは焼成が軟質で、比較的大型のものが多く厚手で、体部形状が内弯気味となり、これには１ー３類となるＸ61・62・66・77・79・80・82がある。ＳＫ297からは上記の全ての色調のものが出土している。

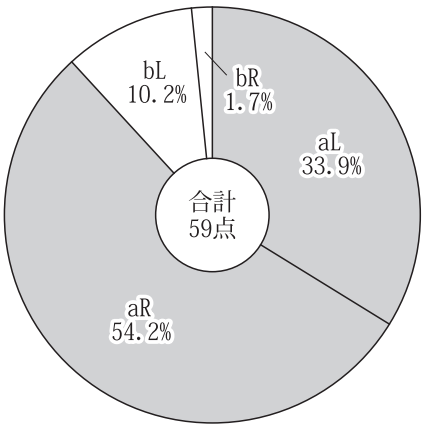
底部の糸切り技法

土師質土器の底部のほとんどには回転糸切り痕跡が残り、一部周縁を除き、その後の調整が行われないため、糸切りの方法と回転方向について観察することができる。仙台城二の丸跡での調査報告[注３]に基づき、図化した123点の中から残存の良好な59点を観察し、底部の糸切り技法を、ａ：糸切り痕跡の中心が縁に寄るもの、ｂ：糸切り痕跡の中心が中央にあるものに分類し、さらに左（Ｌ）と右（Ｒ）の回転方向の違いとの組み合わせで、aL、aR、bL、bRの４つに分類した。ｂ技法では、中心から糸を引抜いたと思われる痕跡が残るものもある。この結果、ａ技法が88.1％と多くを占め、右回転が55.9％で、左回転より若干多い程度となった。糸切り技法と回転方向を合わせると、aLが33.9％、aRが54.2％、bLが10.2％、bRが1.7％となり、ａ技法では右回転が多く、ｂ技法では左回転が多い。

ＳＫ297出土品をみると、全ての種類が出土しており、中でもｂ技法７点中６点がＳＫ297出土もので占められている。その他に残存良好な皿を出土したＳＫ232の４点は全てaRであり、ＳＫ255の３点もaR（他４点不明）であり、出土遺構により切り離し方法が異なる状況がある。二の丸跡では17世紀初頭ー前葉にはａ技法の左回転が多く、ｂ



第332図　底部糸切り技法の類型



	左回転(L)	右回転(R)	合計	不明
ａ技法	20(10)	32(15)	52(25)	64(14)
ｂ技法	6(5)	1(1)	7(6)	
合計	26(15)	33(16)	59(31)	

※（　）はSK297出土の内訳

第333図　底部糸切り技法の類型別比率

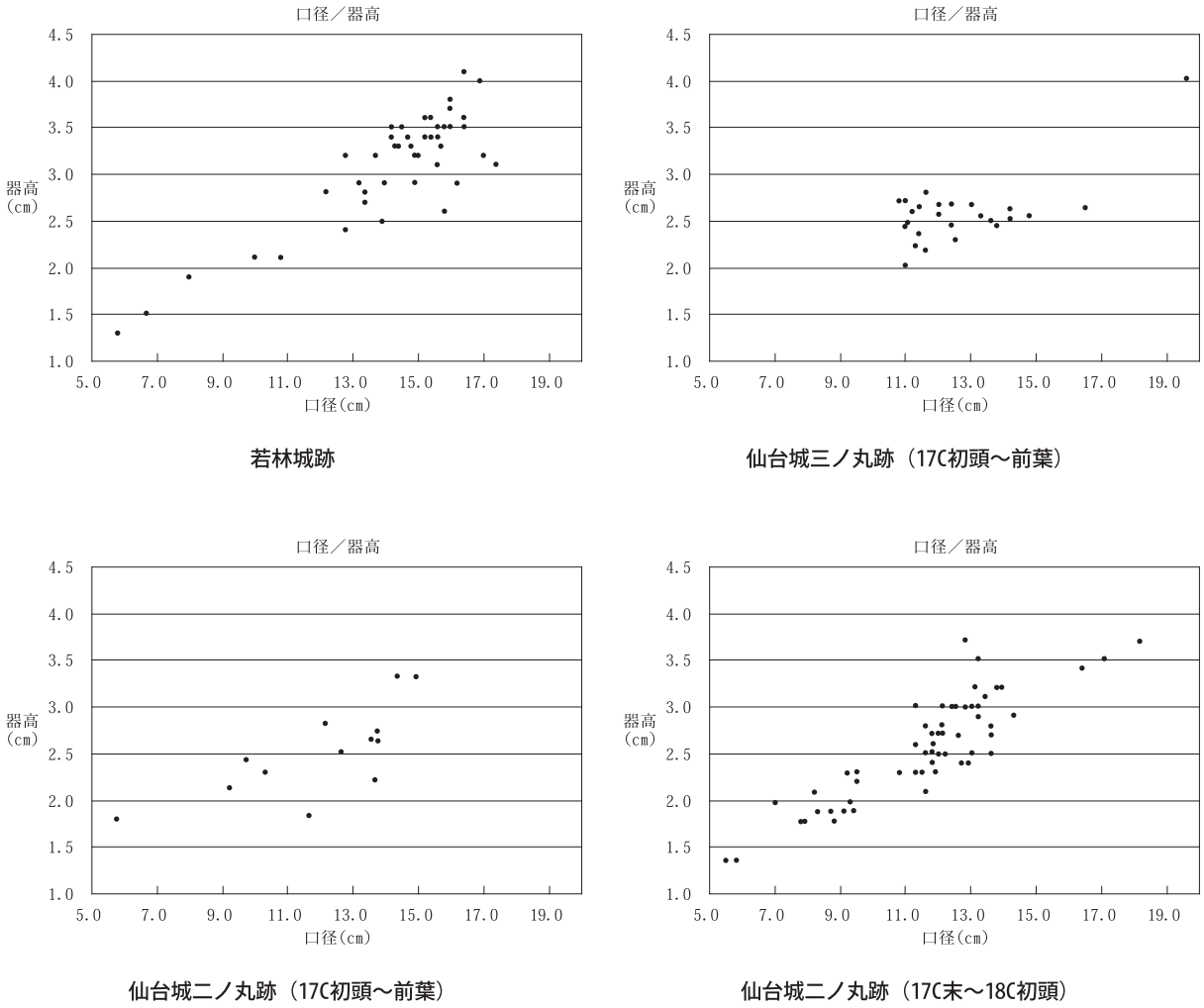
技法はみられないとしており、この若林城跡での出土傾向は二の丸跡のどの時期にも該当しない傾向である。このことが単に製作方法上、何ら意図しない軽微な違いなのか、或いは製作した工人の違いを示しているとの見方も可能であるが、平成22年の第11次調査区では一つの皿にａ、ｂ両技法による痕跡が認められるものがあり、今後、検討を要する。

煤の付着状況

口縁部から体部にかけてタール状の煤の付着が明瞭なものは、図化した123点のうち８点と少量である。煤の付着は多くのものが口縁に沿って波状となっており、これは灯芯を置く位置を変えながら、繰り返し使用した痕跡と考えられる。煤は見込みに付着するものも２点あるが、タール状に固まったものでは無く薄い。煤が口縁部のみに付着する皿と見込みにも付着する皿では、重ねて使用した場合の受け皿と入れ皿の違いに由来する可能性も考えられる。煤の付着は１ー３類の大型と中型のものにみられ、小型の４・５類にはみられない。またＳＫ232出土皿には全て煤の付着が認められ、煤は口縁部付近を一周するように付着しており、内外面には焼き弾けとみられる表面剥離した痕跡もあり、繰り返し使用されたとみられるものが多い。一方、皿を最も多量出土したＳＫ297からは、煤の付着した皿は１点も出土していない。

仙台城跡出土の土師質土器皿との比較

仙台城二の丸跡(注４)と三の丸跡(注５)出土の17世紀初頭ー18世紀初頭の皿を主として、法量について比較を行った。二の丸跡では口径10cmまでのものを小型、10ー15cmまでのものを中型、15cm以上のものを大型とし、三の丸跡では、



第334図　仙台城跡出土土師質土器皿との法量比較

口径が１寸５分ー３寸（約4.5ー約９㎝）までのものをＡ群、３寸５分ー５寸（約10.5ー約15㎝）までのものをＢ群、５寸５分ー７寸（約16.5ー約21㎝）までのものをＣ群と分類している。

二の丸跡では17世紀初頭ー前葉のものは資料が少なく、大型となる口径15㎝以上のものは無い。また17世紀末ー18世紀初頭では、小型の口径８ー10㎝と中型の11ー14㎝のものが多く、大型のものは少ない。18世紀以降についても中型が多く、大型のものはほとんどみられない。器高は概ね口径と比例して増加していく傾向にあることは、時期を通して同じである。三の丸跡の17世紀初頭ー前葉のⅠ期とされるものはＢ群が多く、中でも口径が11ー12㎝のものがまとまって出土している。器高は全般に２ー３㎝で、口径に関わらず器高にはあまり差が認められない。

一方、若林城跡では３類にあたる口径11ー14㎝程度のものはあるものの、中心となるのは２類の14ー16㎝の大型のものであり、仙台城跡二の丸跡や三の丸跡の状況とは明らかに異なっている。器高については、二の丸跡出土品が口径と比例して増加していく傾向であるのに対し、三の丸跡出土品は全般に３㎝以下であり、若林城跡は二の丸跡の傾向に近く、三の丸跡の器高の統一性が目立っている。若林城跡では一括資料を出土したＳＫ232やＳＫ297において、法量のみならず色調、煤の付着、底部糸切り技法の面においても特徴が認められる。このことから、仙台城跡出土の土師質土器との差異は、単に製作者の違いや時期差のみならず、主にみられる法量の差はその使用方法の違いからくる用途差に由来している可能性がある。

［焼塩壷］

全体の特徴

焼塩壷は破片が182点出土しており、そのうち復元した21点を図化した。焼塩壷は全てロクロナデ成形によるものである。

残存がわりと良好のものはＸ５のみで、これ１点をもって全体形がうかがえるものではないが、口径5.2㎝程度、底径推定6.4㎝程度、器高は9.2㎝である。他の焼塩壷の残存部分から推定される全体的な法量は、口径4.0ー5.0㎝、底径4.0ー5.6㎝のものであり、全体に数値的な差はあまり無い。

全体の形状は体部下半が最も幅広く、口縁が内傾しすぼまるものが殆どで、これに体部中位と口縁部の幅に差が無く、体部が直立するものが僅かに含まれる。また前者とみられる底部を欠く資料には体部上半に括れを有するものも一定数認められる。器厚は全体に底部が厚く作られているものが多く、中にはＸ２のように2.5㎝と極端に厚いものもある一方、同様の底径でも明らかに薄いものもある。体部は口縁が狭まるものは口縁に向かい急に薄くなるのに対し、直立するものは厚さが一定しているものもある。

底部には一部のものに回転糸切り痕が残ることから、全てがこの手法で回転台から切り離されたと推定され、ナデやケズリにより再調整されているものも僅かにある。また多くの体部下端には横位または斜位のヘラケズリが施されている。ヘラケズリは切り離し後によるもので、体部と底部の角を斜めに厚くカットすることで体部下位に最大径をもつ原因となっている。底部内面にはロクロ成形によるとみられる渦状のナデ痕跡が顕著にみられるものがある。

焼塩壷はその性格上、二次被熱により表面のみならず内面も赤色化するものが多く、出土したものは全てこの特徴が認められる。全体的に胎土に砂粒などは混入せず緻密である。

焼塩壷は形状や調整等の特徴から、口縁部がすぼまり体部下端にケズリがあるものと、Ｘ60のように口縁部が直立しケズリが無いものに概ね分けることができる。ただしＸ16のように、口縁部がすぼまり気味なのにケズリが無いようなものや、口縁部資料であるが体部に括れをもつものがあるなどから、ここでは分類はせず、特徴の提示に止めることとする。

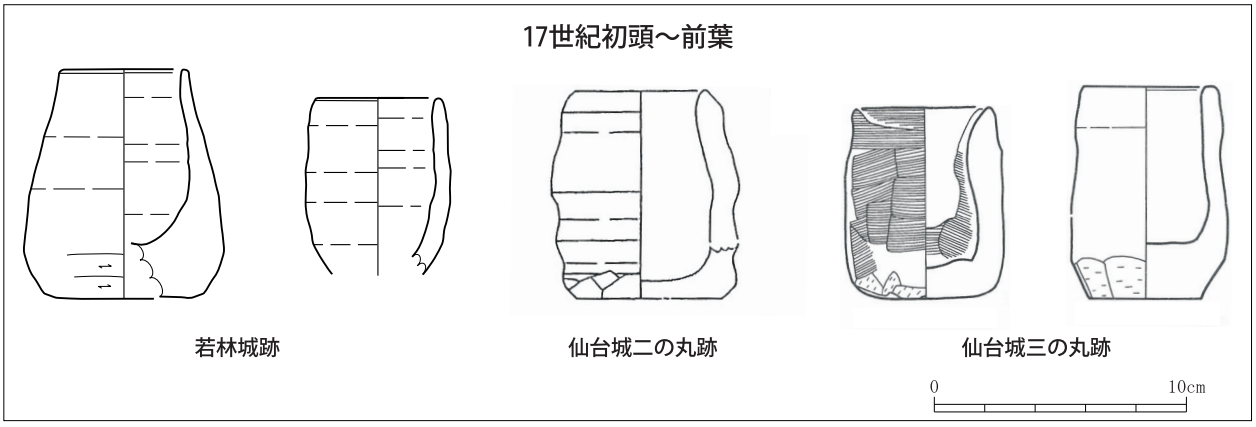
出土傾向

焼塩壷は破片総数182点のうち79.1％に当たる144点が遺構から出土している。中でも出土点数10点以上の遺構であるＳＤ42、２号樋跡、ＳＫ255で総数の53.3％と半数以上を占めている。これらの遺構は第８次調査区の北西部に位置し、この地区は台所建物と想定されるＳＢ１の周辺部であることから、出土量の多さはこの建物内での使用によることが最大の原因と考えられる。

仙台城跡出土焼塩壷との比較

ロクロ成形で体部下端にヘラケズリが施される特徴を持つ焼塩壷は、仙台藩領内で製作されたものとみられており、このような特徴をもつ焼塩壷が江戸遺跡での出土が殆ど無い中、伊達家江戸下屋敷でみられるものは領内からの搬入とされている。このような焼塩壷は仙台城二の丸跡では寛永15年（1638）の造営に伴う整地層やそれ以前の遺構から出土し、三の丸跡では17世紀初めの遺構から出土しており、これらは概ね若林城期から二の丸直前段階に該当する時期のものとされている。また仙台城跡で確認されている非ロクロ成形のものについては、畿内産とされているが、若林城跡では全く出土しておらず、三の丸跡では所属時期が不明、二の丸跡では17世紀初頭から前葉のものとされている。体部に格子タタキ目を有するものも若林城跡では確認できず、これらは三の丸跡では17世紀初頭の可能性があるとした１点が確認されているのみであるが、二の丸跡でこのような焼塩壷の多くは元禄年間以降とされる層から出土し、上野館跡で出土しているものも層位的に二の丸跡とほぼ同時期と推定されており、器形との関係を含め慎重な検討が必要である。さらに焼塩壷にはその産地を示す刻印を押印したものが畿内では一般的に見られるが、本県では上野館跡で出土している「泉州麻生」？の銘刻印が17世紀後半以降のものとされ、伊達家関係としては他に寛永18年（1641）以降に伊達家下屋敷のあった汐留遺跡で出土しているのみである。若林城跡ではこの刻印のあるものの出土もみられない。今後、非ロクロ成形のものや叩き目を有するものが確認される可能性は残っているが、刻印を有するものについては若林城期である17世紀初頭から以後の特徴を示すものと考えられる。

以上のことから、現時点での若林城跡での焼塩壷の出土状況は、資料不足により本来の使用の実態を示していない可能性はあるものの、仙台城の初期段階よりやや遅れた概ね寛永段階でのこの地域での在り方を示しているといえる。若林城跡での出土品は、ロクロ成形により、体部下端にケズリを入れることでその形状には独特なものがあるが、細部においては幾つかの形状があり、これに底部の厚さ等の特徴を加え、そこには幾通りかの用途があったことも推察される。それはまた仙台城と若林城での使用場所や使用状況の違いを示している可能性もある。



仙台城二の丸跡：東北大学埋蔵文化財調査研究センター（1998）
仙台城三の丸跡：仙台市教育委員会（1985）

第335図　仙台城跡出土焼塩壷との比較

（４）中世以前の土器

中世以前の土器では縄文土器、土師器、須恵器が出土している。原則として若林城造営時の整地層であるⅣ層より下層にある遺構は検出と一部の掘削で止めているため、これらの遺物のほとんどは撹乱やⅢ層からのものであるが、土師器の一部には所属時期が明らかなものもある。

［非ロクロ土師器］

Ｃ14はＳＫ338の掘り方埋土から出土した甕の口縁部から体部の破片で、器厚が薄手で、体部から口縁部がくの字に屈曲し、口縁端部がやや外反しており、４世紀代のものの可能性がある。

Ｃ５・６は撹乱やⅢ層から出土した７ー８世紀を中心とする坏である。Ｃ５は須恵器模倣の坏で、外面の口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリが施され、体部中位に蓋受の段を有する。Ｃ６は体部中位の段より上の口縁部がやや内湾し、段の内面は稜線になるもので、内面には黒色処理とヘラミガキが施されている。Ｃ５は概ね７世紀初めころのものとみられるが、６世紀に入る可能性もある。またＣ６は７世紀末から８世紀初めのものとみられる。Ｃ９はＳＸ11から出土した高坏で、内面に黒色処理が施されている。脚部は摩滅が著しいが、ヘラケズリとみられる。Ｃ７はＳＤ60から出土した小型壷か鉢の底部とみられるもので、比較的薄手で外面に粗いヘラケズリ、内面に黒色処理が施される。底部は外面中央が窪んだ丸底風平底である。Ｃ１・15・16は甕の口縁部から体部にかけての破片である。Ｃ１は小溝群８－８から出土しており、体部と口縁部の境でくの字に屈曲し、口縁部は大きく外傾するもので、胎土は白色砂粒を多く含んでいる。Ｃ15・16はＰ62から共伴して出土しており、体部と口縁部に明確な境を持ち、口縁部は緩やかに外傾するもので、口縁部はナデ、外面体部は縦方向のハケメ、内面はヘラナデが施される。Ｃ２ー４・18は撹乱やⅢ層や小溝群８－８から出土した甕の底部である。Ｃ２・３・18は外面にヘラケズリまたはナデ、内面にヘラナデがされ、底部には木葉痕が認められる。以上の高坏や壷・甕の時期は、坏同様に概ね７ー８世紀と考えられる。

［ロクロ土師器］

Ｃ８・11・12・17は9世紀以降の坏で、Ⅲ層やＳＸ11やＳＩ14から出土している。全てロクロ成形で、内面に黒色処理が施され、大半が不明瞭ながらヘラミガキが施され、底部は回転糸切り後、無調整である。Ｃ12には見込みに放射状のヘラミガキが認められる。この中でＣ11・12はＳＩ14出土の遺物で、住居跡の時期を示すものである。大きさは異なるものの、同様の調整と形状である。Ｃ11は口径14.8㎝、底径6.4㎝、器高5.3㎝、Ｃ12は口径18.2㎝、底径6.4㎝、器高6.1㎝である。体部外面にはロクロナデによる稜が顕著で、体部下半は丸みをもつが、上半は直線的に外傾し、内面の底部と体部の境は屈曲するものである。この器形の特徴は、南小泉遺跡の第22・23次調査におけるⅢ期（平安時代）のロクロ土師器坏のⅡａ類に相当している[注6]。また、底径／口径比はＣ11が0.43、Ｃ12が0.35であり、口径／器高比はＣ11が2.79、Ｃ12が2.98である。以上の器形的特徴である法量比率を多賀城出土土器編年と対比すると、10世紀前半ー中頃とされるＥ・Ｆ群土器に相当するものとみられる[注7]。

Ｃ10・13は甕の口縁部から体部にかけての破片で、ＳＩ４から出土している。Ｃ10は体部と口縁部に明確な境はなく、口縁端部は断面四角形でやや外反している。体部は長胴形を呈し、ロクロナデ調整による稜が顕著に現れている。Ｃ13は比較的厚手で、外面はロクロナデが施される。体部と口縁部の境でくの字に屈曲し口縁部は大きく外傾している。甕の時期はロクロ使用の調整から坏の年代と同じ９世紀以降の特徴を持つもので、このことからＳＩ14の年代は10世紀前半ー中頃と考えられる。

調査区の一部が重複する第２次調査では竪穴住居跡が４軒検出され、そのうち３軒からまとまって出土した坏や甕の特徴や、共伴する須恵器などの組み合わせから９世紀末頃から10世紀の年代が想定されている。出土した坏の底径／口径比の平均は0.40、口径／器高比は3.2で、Ｃ11･12の方がやや器高が高い後出の要素を持つものといえる。以上のことから、本調査区周辺の竪穴住居跡群はある一定期間営まれていたものと考えられる。

（５）土製品

Ｐ２は口径推定9.4cm、底径推定6.6cm、器高2.7cmの浅い皿状の器で、溶解した金属を取り分ける取瓶か坩堝とみられる。推定容量は約25ccと小さなもので、注口は残存していないため、取瓶か坩堝かは判別できない。調整は外面が粗いナデ、底部はヘラケズリにより平底状となっている。胎土は灰色で硬質であり、器厚は約1.2cmと厚手である。器の内面全体と口縁部は被熱により器自体が溶解しており、内面には細かい気泡孔が多数みられる。また内外面には径0.5mm以内の金粒とみられる大小の球状物が多数付着しているのが肉眼で確認できた。

この球状物を分析した結果、軟Ｘ線透過写真（第266図）では金属成分が黒色の粒となって確認でき、特に内面には無数に存在している様子が確認できた。口縁部にも少量の反応が認められるが、内面の底部分にはほとんど認められなかった。球状物の組成確認のため、蛍光Ｘ線にて４か所の測定を行い、成分の分析を試みた結果、測定場所２・３において金（Au）を確認した（第268ー271図）。測定の結果、その他の元素も多数確認したが、これは周辺の組織や新しい付着物が混じっている可能性があり、金粒の成分を正確に表しているものではない。成分としては、金が89％みられるほか、銀（Ag）が11％含まれるが、成分比からみて自然金に由来するものとみられる。

この土製品はＳＤ44の最下層から出土しており、近世のものであることは間違い無いが、他に関連する鍛冶関係の遺構や遺物等の確認は皆無で、使用した時期の特定は難しい。養種園遺跡では若林城以前の16世紀代の鍛冶工房跡とみられる遺構と鉄滓、鉄製品などの鉄関連遺物が確認されていると共に、内面に金色粒子が付着する坩堝とされるものが１点出土している。この口径は推定8.6cmで、今回の出土資料に近い小型のものである。若林城跡出土のものについてもまた養種園遺跡同様に中世のものの可能性も否定できないが、これに相当する時期の遺構は全くみられない。このように当時貴重な金を細工する作業に必要であった取瓶か坩堝の出土は、城内の何時の時点において建物の金具等の装飾品を加工製作するなどしていた可能性を示す可能性もある。

（６）金属製品

金属製品は全部で711点出土しており、中でも鉄釘が637点と90％近くを占めている。鉄製品以外の種類では銅製品、金製品、鉛製品などがあり、釘以外の器種では鋏、火箸、銭、矢立、煙管、小柄等があるが僅かである。調査での確認遺構は建物跡などが中心であったが、同様に大広間を確認した仙台城本丸跡での調査では、銅製の釘や飾り金具等が多数出土しているのに対し、若林城跡の調査ではそのような類の出土は皆無である。この理由としては、若林城の建物を城外に搬出する際には金や銅製の当時貴重なものは徹底して取り外し、再利用されたと考えられる一方、特に地中に埋設された施設等に使用された鉄釘などについては、回収したとしても錆ついている状況から、その限りではなかったものと推測される。以下では出土点数が最も多かった鉄釘について、形状、法量、出土傾向等についてみることとする。

［鉄製品］

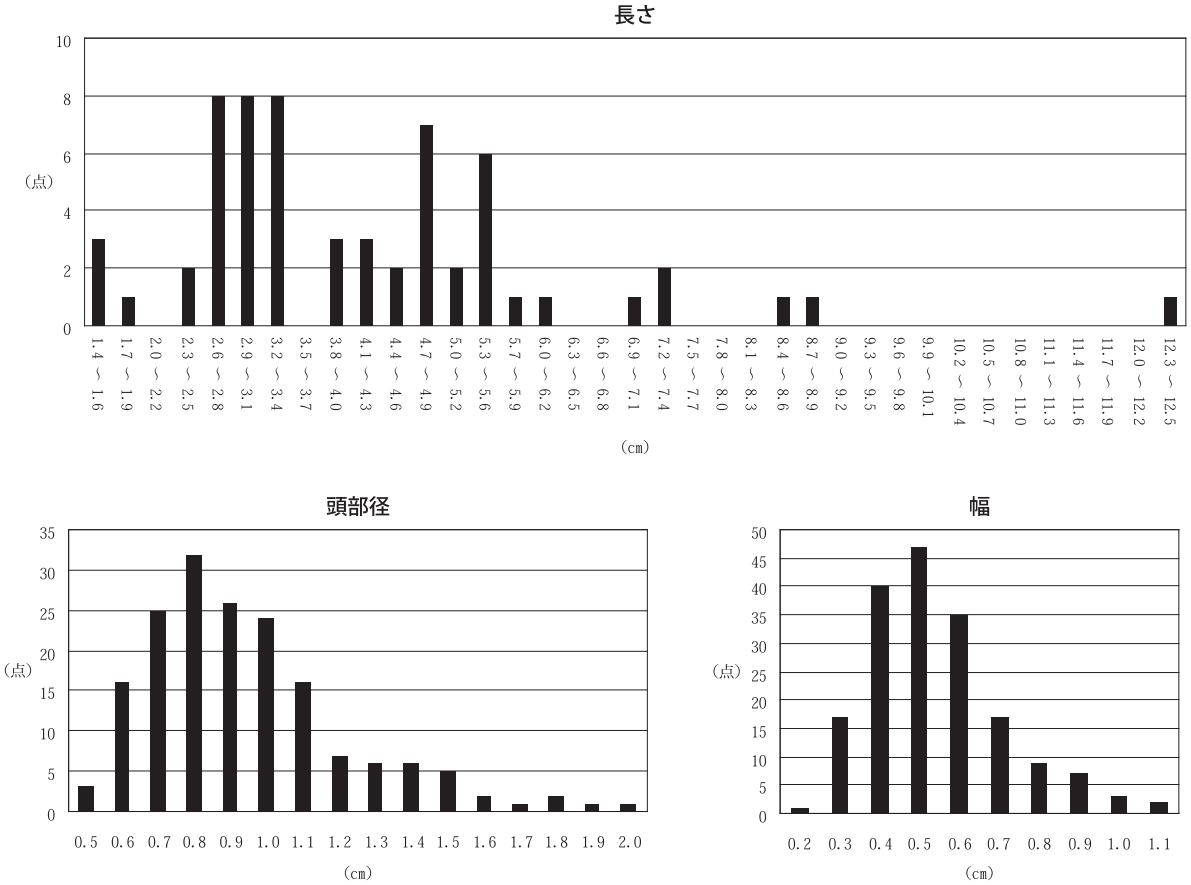
釘

分類　釘は錆や使用等による変形がみられ、残存状態は極めて悪い。大半の釘の胴部の断面形は方形や長方形であり、今回は頭部の形状が異なるものを確認したため、これにより分類を行った。頭部が確認できた釘は131点で全体の21％を占め、以下の３種類に分類される。

１類：一方の端部を叩き延ばした後に巻いて頭部としたもので、113点あり、全体の86％を占めている。頭部は胴部より幅広く、左右対称に膨らむが、中には錆や変形などにより左右対称でないものもみられる。長さがわかるものは29点あり、1.5ー12.5cmと差がある。これらの大半は頭部径と幅がわかるもので、頭部径は0.5ー1.8cm、幅は0.3ー1.1cmである。

２類：頭部を叩き延ばしたままのもので、10点あり、８％を占めている。頭部は胴部幅よりも広く、かなり薄くな

（６）金属製品



第336図　釘法量

っている。長さのわかるものは半数程度あり2.6ー3.4cm、頭部径は0.6ー1.2cm、幅は0.4ー0.6cmである。その形状から未使用品の可能性も考えたが、一応分類した。

３類：胴部から頭部にかけてＬ字型に屈曲しているもので、８点あり、６％を占めている。頭部幅と胴部幅がほぼ同じで、錆や使用による変形により幅が同じではないものや、屈曲角度が緩いものもみられる。１・２類と異なり頭部を延ばさずに棒状のものを曲げたものである。長さのわかるものは６点あり、1.7ー4.7cmである。頭部径は0.6ー1.0cm、幅は0.3ー0.8cmである。

法量　頭部径は頭部上端の幅、胴部幅と厚さは頭部付け根の幅と奥行き部分を計測した。またほとんどの釘が錆による膨張や欠損により製作時の法量をとどめていないため、重量の検討は行わなかった。

長さのわかるものは61点あり、1.5ー12.5cmである（第336図）。長さ2.3ー2.5cmが２点、2.6ー2.8cmが８点、2.9ー3.1cmが８点、3.2ー3.4cmが８点あり、これら26点（43％）が１寸前後の寸法に該当する。また長さ3.8ー4.0cmが３点、4.1ー4.3cmが３点、4.4ー4.6cmが２点、4.7ー4.9cmが７点、5.0ー5.2cmが２点あり、これら17点（28％）が１寸５分前後の寸法に該当する。

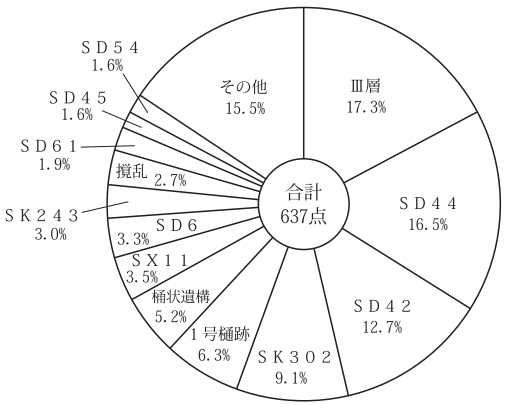
頭部径のわかるものは173点あり、0.5cmー2.0cmである（第336図）。頭部径0.7cmが25点、0.8cmが32点、0.9cmが26点、1.0cmが24点あり、0.7ー1.0cmの合計が107点（62％）となり、これらで大半を占めている。以下では頭部径0.7ー1.0cmを最多頭部径と呼称する。

幅のわかるものは178点あり、0.2ー1.1cmである（第336図）。幅0.4cmが40点、0.5cmが47点、0.6cmが35点あり、0.4ー0.6cmの合計が122点（69％）となり、これらで大半を占めている。以下では幅0.4ー0.6cmを最多幅と呼称する。

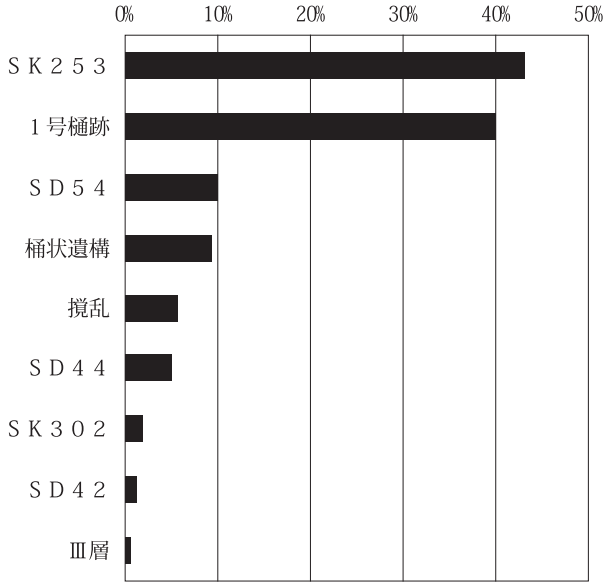
２・３類は出土点数が少ないため、最も多く確認できた１類での割合をみると、長さ１寸前後の釘は16点（55%）、１寸５分前後は５点（17%）、最多頭部径のものは73点（67%）、最多幅のものは81点（72%）である。１類の長さは釘全体での割合以上に１寸前後のものが多い。頭部径と幅の関係は、最多頭部径で最多幅のものが89点（86%）と多数を占める。１寸前後のもので最多頭部径かつ最多幅は17点（65%）、１寸５分前後のものでは９点（53%）であり、いずれの寸法でも半数以上を占めることで一定の規格で釘が製作されたことが分かる。以上のことから、長さは１寸前後と１寸５分前後、頭部径は0.7ー1.0㎝、幅は0.4ー0.6㎝のものが各類型の60%以上を占めており、一定の規格性がみられる。仙台城三の丸跡でも長さ１寸ー４寸のものが出土しているが、三の丸跡では若林城跡の２類に該当するものは確認されていない（注８）。また三の丸跡での幅は0.4ー1.0cmで、ほぼ同程度である。

出土傾向　遺構ごとの出土点数をみると、ＳＤ44が105点、ＳＤ42が81点、ＳＫ302が58点、１号樋跡が40点、桶状遺構が33点、ＳＸ11が22点、ＳＤ６が21点、ＳＫ243が19点、ＳＤ61が12点、ＳＤ45が10点、ＳＤ54が10点となっている（第337図）。出土点数の多い遺構は、壁面に木板を使用したとみられるＳＤ６・42・44・45・61や、木樋を埋設した１号樋跡やＳＤ44、それに桶状遺構などである。また釘に木片が付着するものを32点（全体の５%）確認しており、うち11点が１類である。木片が付着する釘の出土割合が多い遺構としては、１号樋跡が16点（40%）、ＳＤ44が５点（５%）、桶状遺構が３点（９%）で、これらの遺構は樋や桶等の木製品を使用していたとみられる遺構である。ＳＤ44や１号樋跡では釘がほぼ等間隔に並んだ状態で出土しており、これは木樋が腐朽しても釘のみが原位置を保ったまま残ったものと推察される。しかしこれらが、木樋の身と蓋を固定するための釘かあるいは身の組み方に使用した釘かは判断できない。以上のように、多くの釘は１号樋跡やＳＤ44など木材を使用した若林城期の遺構より出土していることがわかる。

今回の調査で出土した釘については、その出土位置から木樋等の用具に使用されたものがある反面、調査で確認した建物やその屋根に葺いた瓦を固定するために使用したとみられるものは具体的に示すことは出来なかった。その背景には、釘といっても当時は貴重な鉄素材であり、それらは建物解体に伴い、建築部材や瓦同様に再利用のために持ち出され、主に再利用の難しい埋設されたものが残された結果との推測もできる。



第337図　釘出土遺構比率



第338図　木片付着率

（６）金属製品

鎹

ＳＸ11からＮ567が１点出土している。平面形はコの字形で、足はやや外側へ開いており、残存長8.3 ㎝、幅0.9㎝、厚さ0.9㎝で、断面形は方形である。第５次調査ではほぼ同様の形状で、長さ8.8㎝、幅0.6㎝、厚さ0.5㎝の鎹が出土しているが、何れの時期も不明である。

火箸

ＳＫ255から１点、桶状遺構から１点の計２点が出土しており、胴部の断面形は方形である。Ｎ399の頭部は胴部よりも細く、径1.3㎝の環状となっているが、錆により詳細は不明である。仙台城三の丸跡の６号土坑では、若林城期とほぼ同時期の元和年間（1615〜1623）とされる層中から、長さ34.7㎝、幅0.6㎝と、長さ29.6㎝、幅0.5㎝の頭部が環状となる火箸が出土しており、環部分に鎖のようなものを通し、２本一対にしていたと推定されている[注９]。この火箸は上部が円形、下部が方形や多角形と断面形が部位によって異なることから、今回出土した火箸も上部と下部で形状が異なっていた可能性もある。またＮ326は棒状の鉄製品で、残存長17.6㎝、幅0.6㎝のものである。幅が同じの釘の最長が12.5㎝であるのに対し長いことや、残存する胴部幅が仙台城三の丸跡出土品と同じであることなどから火箸とした。

鉄滓

Ⅲ層から１点、ＳＫ309から１点、撹乱から１点の計３点が出土している。Ｎ494は下部が丸底状で炉壁に見られるような焼けた土が付着することから、炉底滓とみられる。今回の調査やこれまでの調査において鍛冶に関わる遺構等は確認しておらず、坩堝か取瓶が出土していることからも、城内において鉄製品の製作に関わる小鍛冶を行っていたことも考えられるが、時期的には中世のものの可能性もある。

その他

Ｎ34はＳＤ６から出土しており、断面形は下端が上端よりも薄く、中央部には表面と裏面に突出している箇所があり目釘の可能性も考えられ、欠損箇所は層状に剥離している。Ｎ253はＳＤ44bから出土しており、板状であるが、小破片のため全体の形状は不明である。Ｎ404はＳＫ280から出土しており、径1.4㎝の球形である。いずれも器種は不明である。

［銅製品］

銭

ＳＤ70から１点、ＳＫ297から３点、Ⅲ層から２点の計６点出土している。Ｎ417は天聖元寶、Ｎ557は元豊通寶、Ｎ418は永楽通寶であるが、他の３点は特定できない。Ｎ417〜419はＳＫ297内の多量に廃棄された土師質土器皿の下から出土したことで、何かしら祭祀的な性格を有する可能性もある。

矢立

Ｎ46はＳＤ42の１層から出土しており、廃城後のものの可能性もある。一体型矢立の蓋部分であり、残存長3.1㎝、残存幅2.6㎝である。平面形状は開閉の基軸になる側が直線状で、墨壷の軸とつながり開閉の基部となるとみられる部分が一部残存し、反対側はＵ字形である。縁が全体に緩やかな角度で曲げられている。仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点の18世紀初頭〜19世紀前葉のものとされている20号土坑で、類似した形状の蓋が出土しているが、長さ2.6㎝、幅2.7㎝で、Ｎ46よりも小型のものである[注10]。

その他

Ｎ449は薄い板状であり、平面形は八角形で中央部に径0.5㎝の円形孔がある。外周から孔にかけてなだらかにくぼみ、裏面の孔の縁は隆起していることから、鋳造後に表面から裏面へ向けて穿孔したとみられる。何かしらの部品とみられる。

［その他の金属製品］

煙管

ＳＤ42から１点、ＳＤ76から１点の２点出土している。２点とも火皿部分で、火皿径は1.5㎝である。Ｎ560は火皿の下部に直径0.2㎝の火皿冠の孔がある。残存状態が悪く、全体の作りや時期などは不明である。

小柄

Ｎ25がＳＤ６から出土している。小柄や小刀等の鞘か柄部分かが不明であり、また象嵌などの装飾の有無を確認するため、Ｘ線透過写真を撮影した（第267図）。象嵌は確認できなかったが、内部に刀身とみられる金属を確認したことから、Ｎ25は鞘部分と判明した。鞘の材質を調べるために蛍光Ｘ線分析を行ったところ、付着物に由来するとみられる銅以外の成分も含まれていたが、銅（Cu）を最も多く確認したことから、鞘は銅製であることが判明した（第272・273図）。鞘は全体が残存しており、長さ9.5㎝、幅1.5㎝で、断面形は上端より下端の幅の方が薄い。刀身は茎との境で折れているが、鞘内に収まり残存している。切先は腐食のためか明瞭ではないが、片刃の直刀と推察される。

刀剣類の鞘は木製や皮革製が一般的であるが、仙台城三の丸跡のⅠ期の５号・６号土坑より今回の出土品同様に柄が欠損し鞘が銅製の小柄が２点出土しており、うち１点には鍍金痕がみられる[注11]。今回の調査で出土したものはこれらとほぼ同じ形状や大きさで、鍍金痕のような装飾は確認できないが、若林城期に使用されたものの可能性もある。

一分判金

Ｎ434が小溝群８－16から出土している。表面には扇枠の桐極印と裸の桐極印の間に「一分」という文字が打たれており、裏面には「光次」の文字と花押が打たれている。「一」という文字は右端まで到達している。重さは4.4ｇあり、慶長一分判金の平均的な重さである4.43ｇに近く、慶長一分判金か、品位や量目を慶長一分判金に似せた正徳一分判金の可能性もあるが、出土位置からはこれ以上の特定は難しい。

鉄砲玉

Ｎ448はⅢ層から出土しており、鉛製で一部は腐食のため膨張しており、直径は1.5㎝で重さは14.6ｇである。時期は不明である。

（７）石製品

石製品には砥石と硯があり、これらは全て撹乱またはⅢ層中からの出土である。

砥石

Ｋｄ２・３は中目の砥石で、共に端部片側のみである。材質は砂岩で、全面が使用されており、強い磨耗のため中央部がくびれ、薄くなっている。Ｋｄ３は欠損面が一部赤色化しており、被熱による焼け弾けの可能性がある。使用された時期については不明である。

硯

Ｋｄ４ー７は硯で、材質は黒色硬質粘板岩のいわゆる雄勝石で、表面はミガキ調整や面取りが施されているが、製作途中で破棄された未成品のためか、磨耗や擦痕など使用痕跡はない。Ｋｄ４は硯面陸部に「（名？）取郡」と浅い陰刻がされている。Ｋｄ５はほぼ完成形状を保っており、長さ12.1㎝、幅7.8㎝、高さ2.3㎝である。幅はＫｄ４と同じで、これらは同一規格品と考えられる。Ｋｄ６は中央で横に切断されている。切断面から機械による研削または鋸刃での切断と考えられる。Ｋｄ７は幅3.8㎝、高さ1.4㎝と小型のもので、表面の周縁は断面三角を呈している。出土した雄勝硯は中世から現代まで広く流通するもので、現在では国産硯の約90％の生産量を占めている。出土品の製作時期は不明であるが、近代以降の施設（集治監か？）で製作されたものと推察される。

注

注１・３・４　『東北大学埋蔵文化財調査年報９』

注２・５・８・９・11　『仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書』

注６　『南小泉遺跡第22次・23次発掘調査報告書』

注７　『若林城跡』（第２次調査）

注10　『東北大学埋蔵文化財調査年報19』

第８章　まとめ

［基本層・確認遺構について］

１．第８次・第９次調査区は若林城内の西半部に位置し、確認した基本層位はこれまでの調査同様にⅠ～Ⅶ層に大別できる。各層の性格としては、Ⅰ層が現代の表土層、Ⅱ層が近現代の整地層、Ⅲ層が若林城廃城後の近世の畑耕作土、Ⅳ層が若林城造営に伴う整地層、Ⅴ層が若林城以前の旧表土層、Ⅵ・Ⅶ層が自然堆積層であり、今回、Ⅴ層は確認できなかった。

２．今回の調査ではⅢ層、Ⅳ層、Ⅵ層の各上面で下記の遺構を確認した。

時期	遺構	単位	数量	備考	時期	遺構	単位	数量	備考
若林城期	礎石建物跡	棟	10	礎石跡278基	若林城廃城後	溝跡	条	12	若林城期の再利用10条
	溝跡	条	31			集石遺構	基	9	
	池跡など	基	4			土坑	基	127	
	樋跡	基	1			ピット	基		
	塀跡	基	4		近現代	六角塔基礎			
	石敷遺構	箇所	4			井戸跡	基	1	
	桶状遺構	基	1			樋跡	基	1	
	整地土					土坑	基	1	
	土坑	基	6		若林城以前	竪穴住居跡	軒	11	
	ピット	基				溝跡	条	9	
若林城廃城後	小溝状遺構群	群	2	21条		土坑	基	16	
	畝状遺構	条	1			ピット	基		

第25表　確認遺構一覧

３．若林城の遺構には礎石建物跡をはじめ、雨落ち溝跡や水路跡、池跡など多数ある。礎石建物跡は大型のものから廊下の可能性のあるものなど10棟を確認し、これらの建物群は個々の規模や内部施設、さらに配置状況からみて若林城の表側の中心となる殿舎群と考えられ、御殿建物と呼ぶに相応しいものである。

４．礎石建物跡の柱間寸法をはじめ施設の配置は、１間を６尺５寸（1.97m）とした基準により造られており、城内全ての施設は綿密な計画のもとに正確に配置されている。

５．第５次調査で確認していた１号建物跡と２号建物跡の東端を確認したことで、両建物の規模や形状が判明し、『御二之丸御指図』との照合から、１号建物跡は若林城における台所建物であり、廃城後の寛永15年に二の丸の「大台所」として移築され、さらに６号建物跡は「上台所」として移築された可能性が高いことが判明した。また指図の観察から、若林城より移築された建物は二の丸においても、同じ１間６尺５寸で建てられた可能性が高い。

６．２号建物跡は内部の構造や建物位置からみて、城内殿舎の中では最も格式が高いとみられる建物で、仙台城本丸における大広間や、二の丸における小広間に相当する広間的な中心建物と考えられる。９号建物跡はこれまで確認した建物の中では最大規模で、内部は複数の部屋に仕切られていたと推定され、城内における中心建物の一つとみられる。

７．城内を区画した塀跡を境に、城内は西側の「表」と、北東側の「奥」とに分けられていたと考えられる。

８．建物間に配置された池跡はそれぞれが形状や構造が異なる特徴あるもので、また池に上水を流すために建物下部に埋設した樋跡は、江戸時代初期の施設として貴重な発見となった。

９．雨落ち溝や水路の構造は隣接する建物の性格等により多岐にわたることがわかった。またこれまで城内の施設には改修の痕跡が殆ど見られなかったが、今回、建物の増築や広範囲にわたる溝の改修状況を確認した。

10. 建物群の下部全域には普請作業である整地が行われている。整地は当時の地表を削り取り、再び敷き均した構造で、作事前に大規模かつ入念に行われた基礎地業である。
11. 若林城廃城後の遺構には、小溝状遺構群や溝跡、土坑、集石遺構などがあり、殆どは畑耕作に伴うもので御薬園にかかわる遺構と考えられる。これらは調査区全域に確認できることから、耕作は広範囲に行われ、かつての雨落ち溝や水路の一部は廃城後も改修、使用していることがわかった。
12. 若林城造営以前の遺構としては、大規模な溝跡２条をはじめ、竪穴住居跡等がある。溝跡の一つは城造営の直前に埋め戻されていることが判明した。竪穴住居跡の時期は平安時代とみられ、周辺には微高地上に営まれた集落が存在したと考えられる。

［出土遺物について］

１．第８次・第９次調査で出土した遺物は下記の通りである。

時代	種類	器 種
若林城期	瓦	軒丸瓦・丸瓦・軒平瓦・平瓦・熨斗瓦・輪違い・面戸瓦・菊丸瓦・鬼瓦など
	陶磁器	志野・織部・瀬戸美濃・丹波・唐津・岸窯系・中国・肥前など
	土師質土器	皿・焼塩壷
	金属製品	鉄釘・鎹
その他の近世	陶磁器	瀬戸美濃・大堀相馬・小野相馬・堤など
	瓦質土器	火鉢
	土製品	取瓶か坩堝？・土人形
	金属製品	煙管・銅銭・一分判金・鉛玉・小柄など
その他の時代	縄文土器、土師器、須恵器、埴輪、中世陶器(常滑・在地)、硯、桟瓦など	

第26表　出土遺物一覧

２．若林城期に相当する遺物の出土量は極めて少なく、この理由としては、城の存続期間が短いことに加え、廃城時に多くの建物の移築先である仙台城二の丸などに持ち出されたことが考えられる。
３．出土量の最も多い瓦については、移築時に破損等により再利用ができなかったものがまとめて廃棄されたものと考えられる。これらの瓦は後世の畑耕作の際に支障となったものを土坑に埋めるなどしている。
４．軒瓦の文様は仙台城と比較して種類が少なく、特に軒丸瓦文様は三巴文のみの出土であり、近世初期の仙台藩における城館等での瓦使用の特徴を表している。また建物の屋根材については、１号建物跡が瓦葺とみられるほか、中心建物である２号建物跡は周辺で棟瓦系の出土量が多いことから、一部に瓦を使用した板葺きの可能性が高く、９号建物跡も同様とみられる。
５．陶磁器は破片が少量出土しているにすぎないが、１号建物跡周辺での擂鉢の出土量が多いことは、台所建物としての性格を表しているといえる。また時期別に見た陶磁器産地の傾向は、市内における近世遺跡の傾向とほぼ一致している。
６．土師質土器の皿は土坑からの一括資料があり、近世初期における当地域での特徴を示すと言えるが、仙台城跡各地点出土資料と比較して大型の傾向がある。
７．金粒が付着した取瓶か坩堝とみられる土製品の出土は、城内で金細工加工に関わる作業を行っていた可能性を示すものとして貴重である。

参考・引用文献

芦屋市教育委員会『大阪城石垣のふるさとを歩く』 2007

江戸遺跡研究会『図説　江戸考古学研究事典』柏書房　2001

江戸遺跡研究会『江戸の食文化』吉川弘文館

追川吉生『江戸のミクロコスモス　加賀藩江戸屋敷』シリーズ歴史を学ぶ011　新泉社　2004

追川吉生『江戸城・大名屋敷』江戸のなりたち１　新泉社　2007

小井川百合子『木村宇右衛門覚書　伊達政宗言行録』新人物往来社　1997

小川望『焼塩壷と近世の考古学』同成社　2008

小沢朝江・水沼淑子『日本住居史』吉川弘文館　2006

小倉強『明治の洋風建築』1976

学習研究社『仙台城』歴史群像　名城シリーズ13　1996

学習研究社『図説　城造りのすべて』歴史群像シリーズ　2006

学習研究社『名古屋城』歴史群像　名城シリーズ４　2000

株式会社宇瓦工業所『葺上の跡』 2006

神崎勝『冶金考古学概論』 2006

木全敬蔵「測量技術」『講座・日本技術の社会史　第六巻』 土木　1984

木村礎・藤野保・村上直編集『藩史大辞典　第１巻　北海道・東北編』 1988

九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』 2000

九州近世陶磁学会『国内出土の肥前陶磁−東日本の流通をさぐる−』 2001

京都国立博物館『京焼−みやこの意匠と技−』 2006

小林章男・山田脩二『瓦−歴史とデザイン』 2001

小林清治『仙台城と仙台領の城・要害』日本城郭史研究叢書第二巻　名著出版　1982

近藤真佐夫「東北地方における城郭瓦の受容と展開」『森宏之君追悼城郭論集』織豊期城郭研究会　2005

篠山町教育委員会 『史跡篠山城跡−二の丸発掘調査報告書−』篠山町文化財資料第28集　1995

（財）大阪府文化財センター『大阪城址Ⅲ』（財）大阪府文化財センター調査報告書第144集　2006

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター『江戸時代の美濃窯』 2003

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター『江戸時代の瀬戸・美濃窯』 2004

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター『江戸時代のやきもの−生産と流通−』 2006

佐賀県立名護屋城博物館『特別史跡「名護屋城跡並びに陣跡」前田利家陣跡』2008

佐藤淳「仙台市若林城跡の実像」『日本歴史　第706号』日本歴史学会　2007

佐藤洋「仙台城跡出土の陶磁器と在地の焼物流通」『季刊考古学第110号』 2010

佐藤洋「仙台城跡出土の陶磁器」『淡交』淡交社　2005

佐藤洋・森田義史・大久保弥生「宮城県内近世遺跡出土の土人形」『関西近世考古学研究16』関西近世考古学研究会　2008

佐藤巧『近世武士住宅』叢文社　1976

織豊期城郭研究会『織豊城郭創刊号』 1994

織豊期城郭研究会『織豊期城郭の瓦』織豊期城郭資料集成Ⅰ　1994

白幡洋三郎『江戸の大名庭園　INAX　ALBUM25』 1994

新人物往来社『日本城郭体系３』 1981

瑞巌寺『瑞巌寺の歴史』 1997

瑞巌寺『瑞巌寺』 2001

鈴木功・堀江格「福島市飯坂町岸窯跡について」『福島考古第37号』 1996

関根達人「相馬焼の生産と流通」『江戸の物流−陶磁器・漆器・瓦から−』江戸遺跡研究会　1999

瀬戸市史編纂委員会『瀬戸市史陶磁史篇六』 1998

仙台市『仙臺市史　第１巻』 1955

仙台市教育委員会『郡山遺跡−第112次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第222集　1997

仙台市教育委員会『郡山遺跡−第124次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第251集　2001

仙台市教育委員会『郡山遺跡−統括編（１）−』仙台市文化財調査報告書第283集　2005

仙台市教育委員会『仙台の遺跡（改訂版）』仙台市文化財パンフレット第55集　2005

仙台市教育委員会『仙台城跡１−平成13年度調査報告書−』仙台市文化財調査報告書第259集　2002

仙台市教育委員会『仙台城跡２−平成14年度調査報告書−』仙台市文化財調査報告書第264集　2003

仙台市教育委員会『仙台城跡３−平成15年度調査報告書−』仙台市文化財調査報告書第270集　2004

仙台市教育委員会『仙台城跡４−平成15年度調査報告書−』仙台市文化財調査報告書第271集　2004

仙台市教育委員会『仙台城跡５−平成16年度調査報告書−』仙台市文化財調査報告書第285集　2005

仙台市教育委員会『仙台城跡６−平成17年度調査報告書−』仙台市文化財調査報告書第297集　2006

仙台市教育委員会『仙台城跡７−平成18年度調査報告書−』仙台市文化財調査報告書第309集　2007

仙台市教育委員会『仙台城跡−仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ−』仙台市文化財調査報告書第342集　2009

仙台市教育委員会『仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第76集　1985

仙台市教育委員会『仙台城本丸跡１次調査　出土遺物編』仙台市文化財調査報告書第282集　2005

仙台市教育委員会『仙台城本丸跡１次調査　本文編』仙台市文化財調査報告書第349集　2009

仙台市教育委員会『仙台市宮城野区・若林区文化財分布図』 1996

仙台市教育委員会『保春院前遺跡他　発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第274集　2004

仙台市教育委員会『南小泉遺跡第16〜18次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第140集　1990

仙台市教育委員会『南小泉遺跡第19次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第141集　1990

仙台市教育委員会『南小泉遺跡第22次・23次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第192集　1994

仙台市教育委員会『南小泉遺跡第28次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第325集　2008

仙台市教育委員会『養種園遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第214集　1997

仙台市教育委員会「若林城跡」『年報６』仙台市文化財調査報告書第83集　1985

仙台市教育委員会『若林城跡』仙台市文化財調査報告書第90集　1986

仙台市教育委員会『若林城跡第３次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第256集　2002

仙台市教育委員会『若林城跡第４次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第292集　2005

仙台市教育委員会『若林城跡第５次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第323集　2008

仙台市教育委員会『若林城跡第６次・第７次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第306集　2007

仙台市教育委員会『若林城跡発掘調査（第10次）資料』宮城刑務所矯正展資料展示会資料　2009

仙台市教育委員会『若林城跡と養種園遺跡』仙台市文化財パンフレット第48集　2001

仙台市史編さん委員会『仙台市史　資料編２　近世１　藩政』 1996

仙台市史編さん委員会『仙台市史　資料編13　伊達政宗文書４』 2007

仙台市史編さん委員会『仙台市史　通史編１　原始』 1999

仙台市史編さん委員会『仙台市史　通史編２　古代中世』 2000

仙台市史編さん委員会『仙台市史　通史編３　近世１』 2001

仙台市史編さん委員会『仙台市史　通史編４　近世２』 2003

仙台市史編さん委員会『仙台市史　通史編５　近世３』 2004

仙台市史編さん委員会『仙台市史　通史編６　近代１』 2008

仙台市史編さん委員会『仙台市史　特別編１　自然』 1994

仙台市史編さん委員会『仙台市史　特別編２　考古資料』 1995

仙台市史編さん委員会『仙台市史　特別編７　城館』 2006

仙台市博物館『図説　伊達政宗』河出書房新社　1986

仙台市博物館『仙台市博物館調査研究報告　第６号』1986

仙台市養種園『養種園90年のあゆみ』 1989

高橋昭子・馬場昌子『台所のはなし』物語ものの建築史　鹿島出版会1992

高橋康夫『建具の話』物語ものの建築史　鹿島出版会　1985

竹内靖長「江戸時代の上水道施設」『季刊考古学第108号』 2009

田中昭三『大名庭園』小学館　1997

田中哲雄『日本の美術　№429　発掘された庭園』至文堂　2002

谷口徹「御殿の構造」『季刊考古学第103号』2008

中世土器研究会『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　1995

坪井利弘『古建築の瓦屋根』理工学社　1981

坪井利弘『これだけは知っておきたい建築家のための瓦の知識』鹿島出版会　1988

坪井利弘『図鑑瓦屋根（改訂版）』理工学社　1986

坪井利弘『日本の屋根瓦』理工学社　1976

出川直樹『古陶磁真贋鑑定と鑑賞』講談社　2005

東海大学校地内遺跡調査団『回せ！−回転運動から考古資料を考える−』 2009

東京都埋蔵文化財センター『汐留遺跡Ⅰ　旧汐留貨物駅跡地内遺跡の発掘調査』東京都埋蔵文化財センター調査報告第37集1997

東北大学埋蔵文化財調査委員会「仙台城二の丸跡」『東北大学埋蔵文化財調査年報１』 1985

東北大学埋蔵文化財調査委員会「仙台城二の丸跡」『東北大学埋蔵文化財調査年報６』 1993

東北大学埋蔵文化財調査委員会「仙台城二の丸跡」『東北大学埋蔵文化財調査年報７』 1994

東北大学埋蔵文化財調査室『東北大学埋蔵文化財調査年報19』第２分冊　2009

東北大学埋蔵文化財調査室『東北大学埋蔵文化財調査年報19』第４分冊　2008

東北大学埋蔵文化財調査室『東北大学埋蔵文化財調査年報19』第５分冊　2010

東北大学埋蔵文化財調査研究センター「仙台城二の丸跡」『東北大学埋蔵文化財調査年報８』 1997

東北大学埋蔵文化財調査研究センター「仙台城二の丸跡」『東北大学埋蔵文化財調査年報９』 1998

東北大学埋蔵文化財調査研究センター「仙台城二の丸跡」『東北大学埋蔵文化財調査年報13』 2000

東北大学埋蔵文化財調査研究センター「仙台城跡二の丸」『東北大学埋蔵文化財調査年報18』 2005

東北大学埋蔵文化財調査研究センター「仙台城二の丸北方武家屋敷地区」『東北大学埋蔵文化財調査年報19』第１分冊　2006

東北歴史資料館『宮城県の瓦職』東北歴史資料館資料集34　1993

土岐津町誌編纂委員会『土岐津町誌史料編』 1999

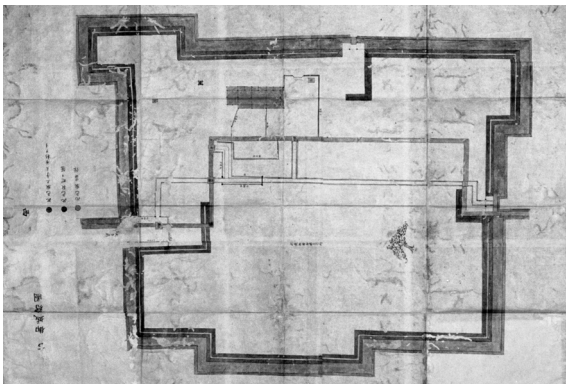
中井均「滴水瓦に関する一考察」『織豊城郭第2号』織豊期城郭研究会　1995

名古屋市『旧国宝名古屋城本丸御殿資料調査報告書』1979

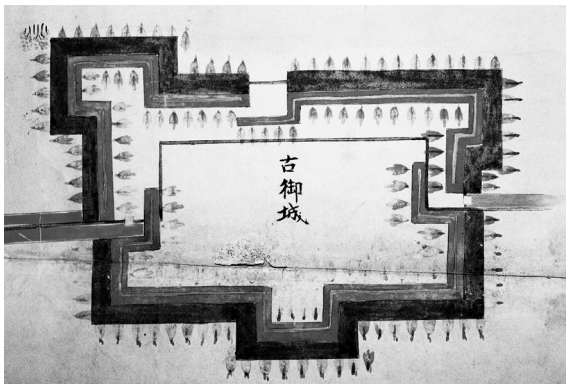
名古屋市『特別史跡名古屋城跡　本丸御殿跡発掘調査報告書　第１ー４次調査』 2009
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館『飛鳥の工房』 1992
楢崎彰一『三彩緑釉・瀬戸・常滑　日本のやきもの⑥』 講談社　1992
西和夫『図解　古建築入門』彰国社　1990
西桂『日本の庭園文化』学芸出版社　2005
日本鬼師の会『鬼瓦・瓦屋根再考』 2005
橋本文雄『日本の美術　№75　書院造』至文堂　1972
波多野純「水道(用水）」『講座・日本技術の社会史　第六巻』 土木　1984
彦根城博物館『特別史跡彦根城跡　表御殿発掘調査報告書』 1988
平井　聖『城と書院』日本の美術13　平凡社　1965
福島市教育委員会『岸窯跡』福島市埋蔵文化財報告書第111集　1998
藤岡通夫『城と書院』ブックオブブックス日本の美術16　小学館　1971
藤岡通夫『書院Ｉ』創元社　1969
福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡』1989
福島県考古学会中近世部会「かわらけ編年の再検討-11世紀から19世紀-（その１）」『福島考古第37号』 1996
福島県考古学会中近世部会「かわらけ編年の再検討-11世紀から19世紀-（その２）」『福島考古第38号』 1997
平凡社『宮城県の地名』日本歴史地名大系４　1987
毎日新聞社『国宝15　建造物Ⅲ』
前久夫『床の間の話』物語ものの建築史　鹿島出版会　1988
三浦圭一「中世の土木と職人集団」『講座・日本技術の社会史　第六巻』土木　1984
三原良吉『宮城刑務所と若林城跡』 1948
宮城県教育委員会『国宝・重要文化財　瑞巌寺修理工事報告書』 1958
宮城県教育委員会『上野館跡』宮城県文化財調査報告書第156集　1993
宮城県教育委員会『硯沢・大沢窯跡ほか』宮城県文化財調査報告書第116集　1987
宮城県考古学会『宮城考古学第10号』2008
宮元健次『図説　日本庭園のみかた』学芸出版社　1998
村井益男「近世初期の城館建設」『講座・日本技術の社会史　第六巻』土木　1984
村田晃一「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古第36号』 1995
村田修三「中世の城館」『講座・日本技術の社会史　第六巻』土木　1984
森郁夫『瓦』ニュー・サイエンス社　1986
八代市教育委員会『麦島城跡』八代市文化財調査報告書第30集　2006
山崎信二『近世瓦の研究』同成社　2008
山田幸一『日本壁のはなし』物語ものの建築史　鹿島出版会　1985
大和智『日本の美術　№405　城と御殿』至文堂　2000
山本忠尚『鬼瓦　日本の美術391号』 至文堂　1998
若林地域考文化歴史編『シンポジウム　もうひとつの城　若林城　講演記録集』 2004
渡辺信夫編集『図説　宮城県の歴史』 1988

写　真　図　版

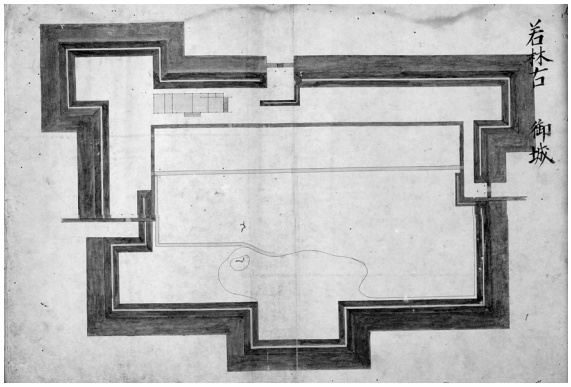
『仙台城下絵図』（寛政元年）　※丸印が若林城跡　仙台市博物館所蔵



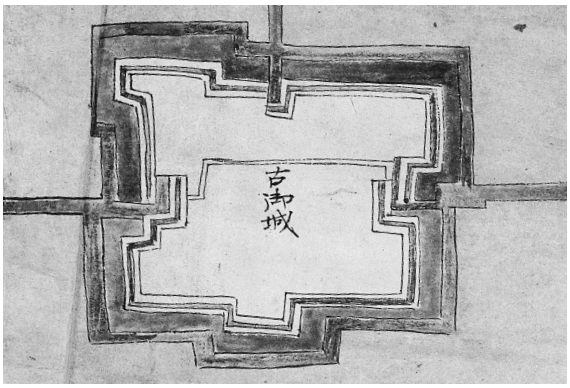
『古御城絵図』
宮城県図書館所蔵



『仙台城下絵図』（寛政元年）※上図の拡大

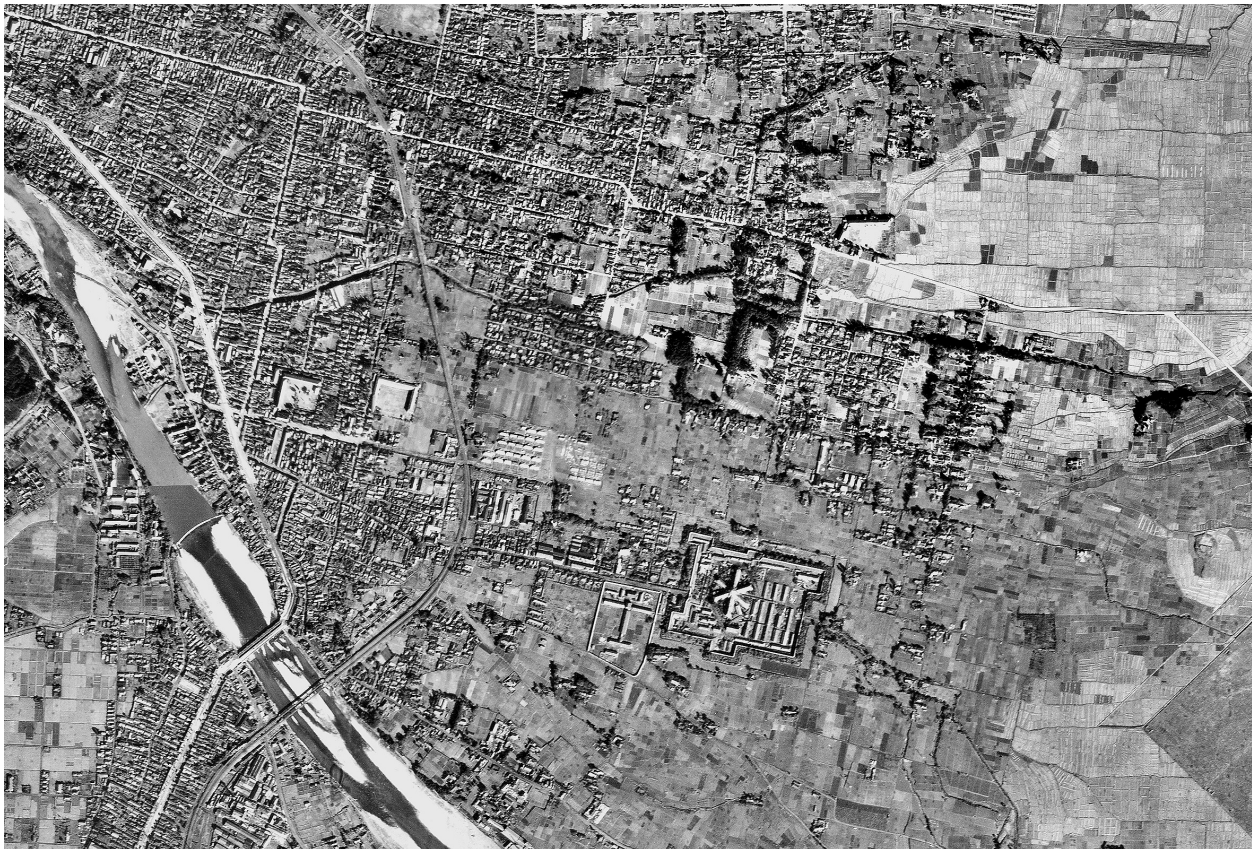


「若林古　御城」『御修復帳』（文化～文政）
宮城県図書館所蔵



『仙台城下絵図』（宝暦～明和）　※部分
（財）斉藤報恩会所蔵

写真図版１　若林城関係絵図



若林城跡周辺（昭和22年米軍撮影・上が北）

「六角塔」（撮影年不明・西から）　宮城刑務所所蔵

写真図版２　若林城跡（１）

城東側の門跡と土橋跡（南東から）

城東側の土塁と堀跡（北東から）

城南側の土塁と堀跡（西から）

城南側の張り出し（南西から）

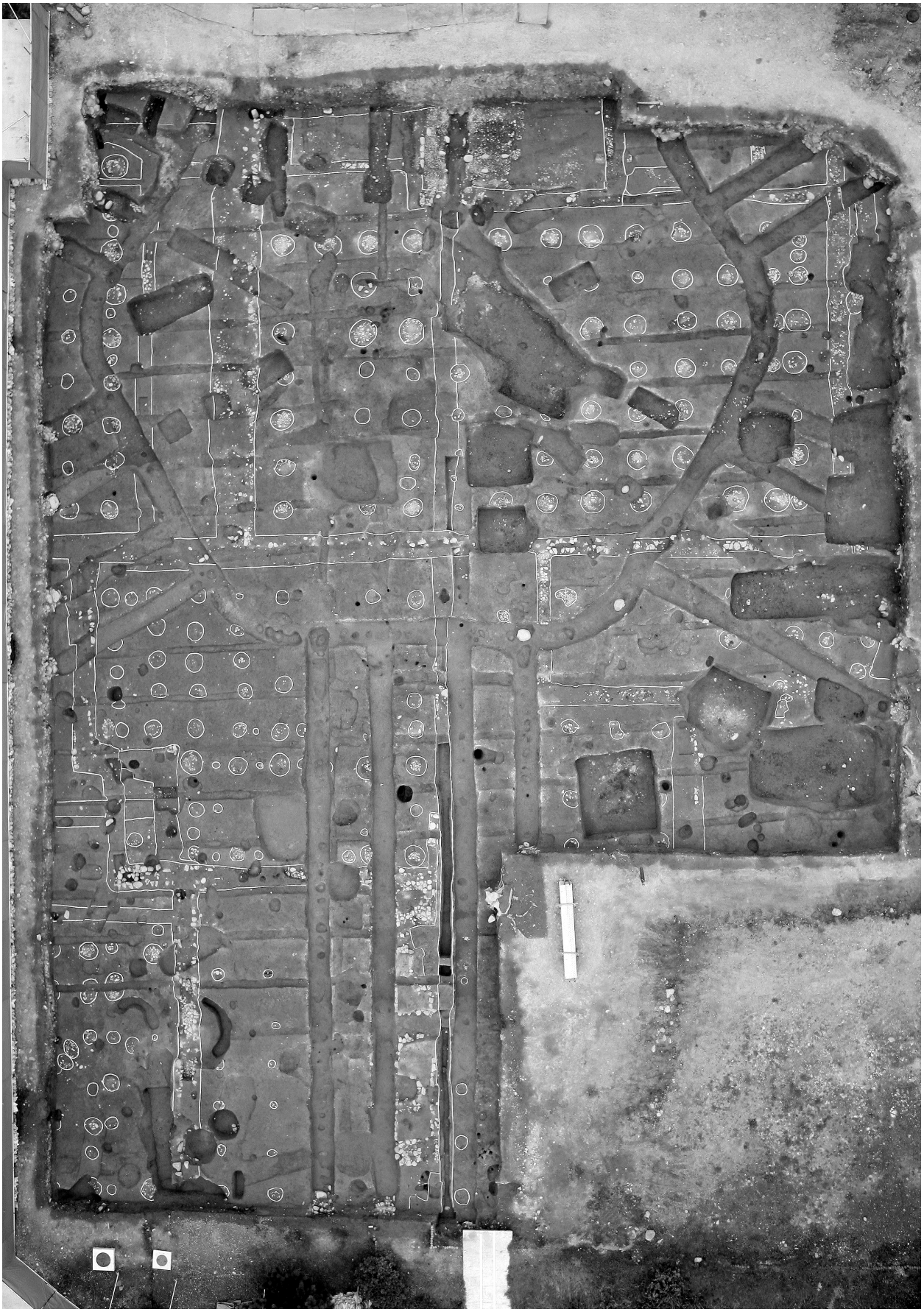
城西側の土塁（北西から）

城西側の門跡と内桝形土塁（南東から）

現在の六郷堀（北から）

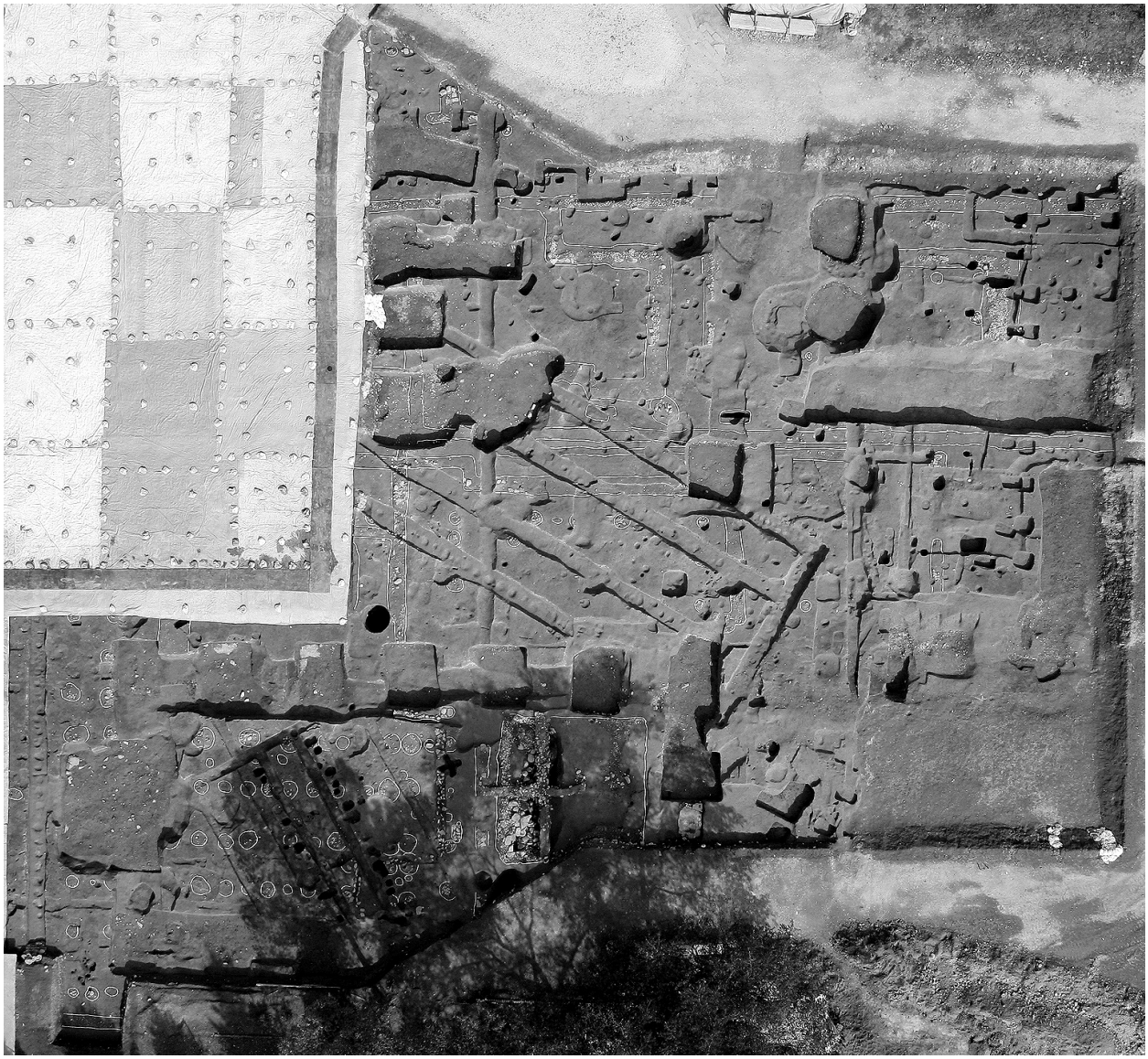
国指定天然記念物「朝鮮ウメ」（臥竜梅）

写真図版３　若林城跡（２）



第８次調査Ⅳ層上面遺構　全景（上が北）

写真図版４　若林城期遺構全景（１）



第９次調査Ⅳ層上面遺構　全景（上が北）

写真図版５　若林城期遺構全景（２）

43号集石遺構　検出状況（東から）

44 ～ 47号集石遺構　検出状況（北から）

44号集石遺構　検出状況（北から）

45号集石遺構　検出状況（北から）

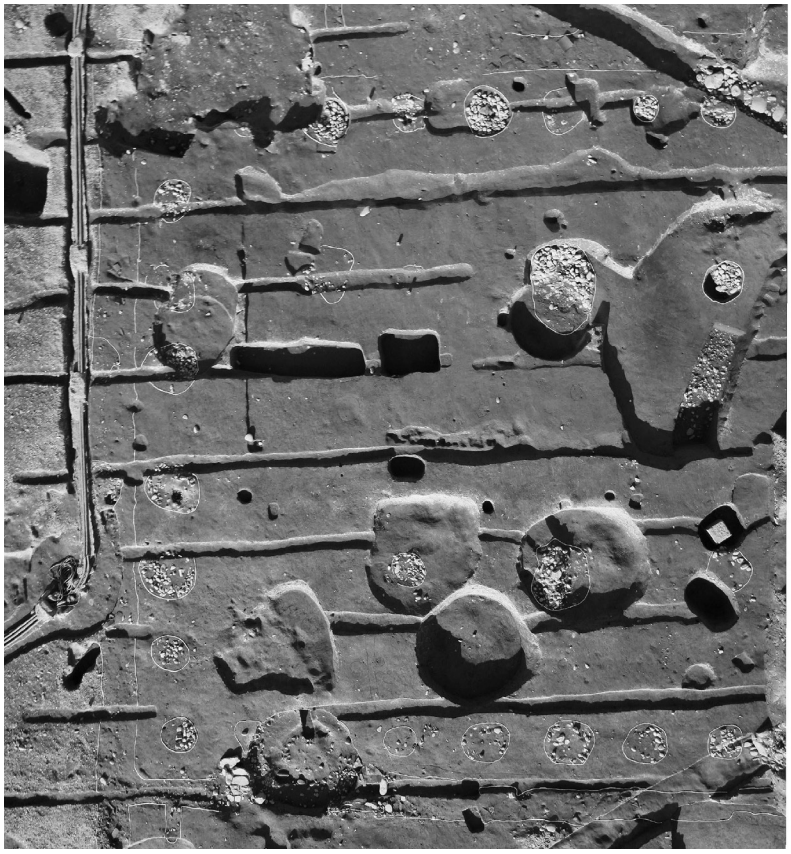
46号集石遺構　検出状況（北から）

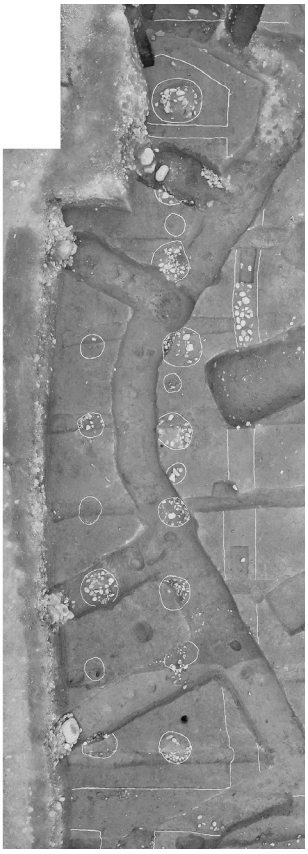
47号集石遺構　検出状況（北から）

48号集石遺構　検出状況（北から）

49号集石遺構　検出状況（南西から）

写真図版６　Ⅲ層上面集石遺構





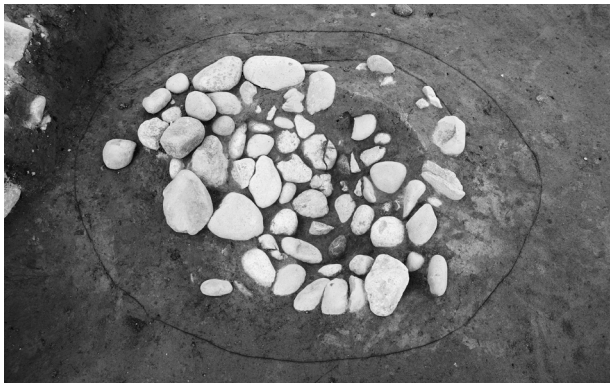
１号礎石建物跡　全景（上が北）

※第５次調査区（左写真）を合成

１号礎石建物跡　東端部全景（北東から）

写真図版７　１号礎石建物跡

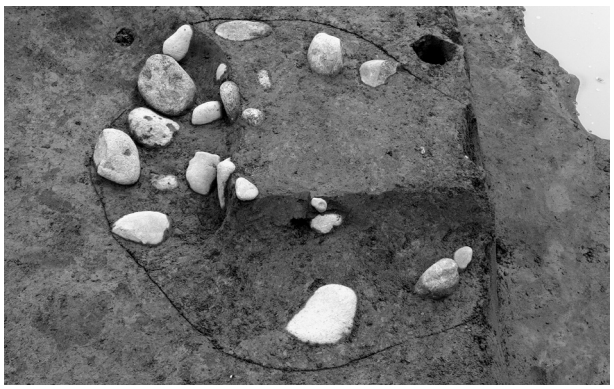
礎石跡30　検出状況（西から）



礎石跡30　掘込み状況（南から）

礎石跡36　検出状況（西から）

礎石跡36　掘込み状況（西から）



礎石跡37　検出状況（北から）

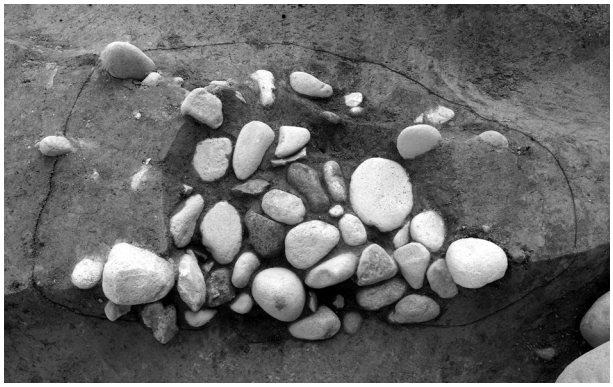
礎石跡37　掘込み状況（北東から）

礎石跡41　検出状況（東から）

礎石跡41　掘込み状況（西から）

写真図版８　１号礎石建物跡　礎石跡（１）

礎石跡42　検出状況（北から）



礎石跡42　掘込み状況（北から）

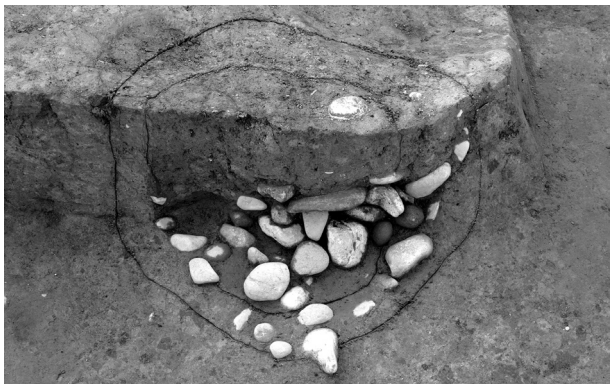
礎石跡44　検出状況（北から）

礎石跡44　掘込み状況（東から）

礎石跡34　検出状況（北から）

礎石跡35　検出状況（東から）

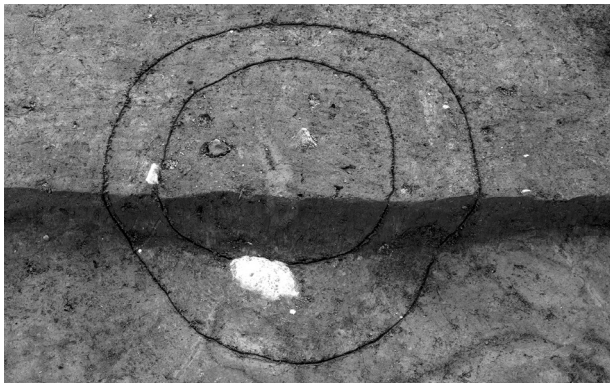
礎石跡38　検出状況（西から）



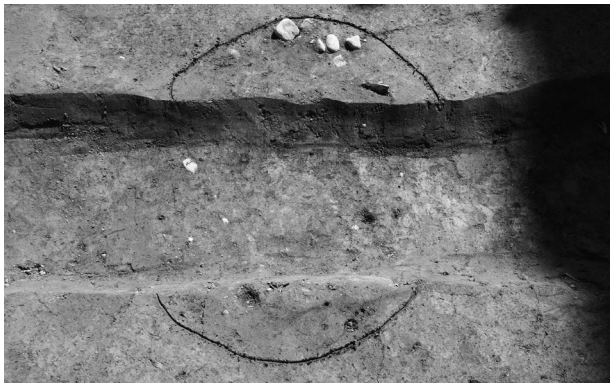
礎石跡39　検出状況（北東から）

写真図版９　１号礎石建物跡　礎石跡（２）

礎石跡40　検出状況（西から）

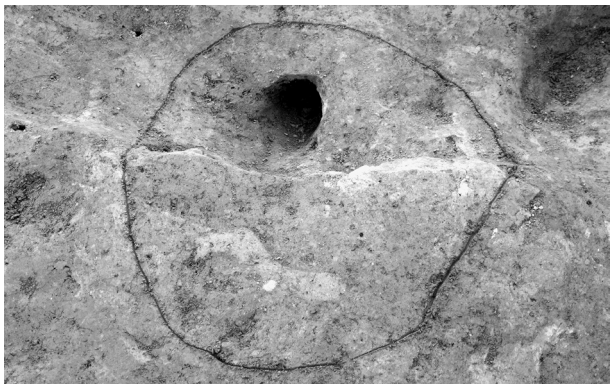


礎石跡43　検出状況（北から）

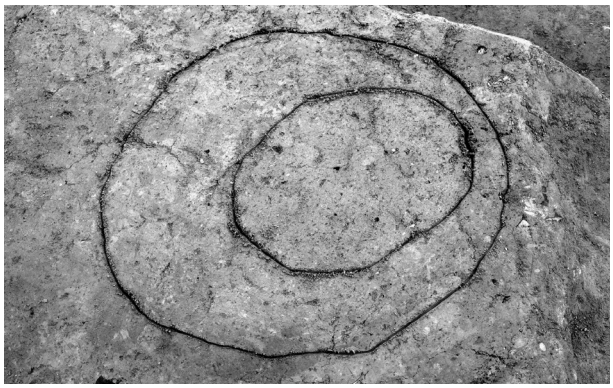


礎石跡45　検出状況（北から）

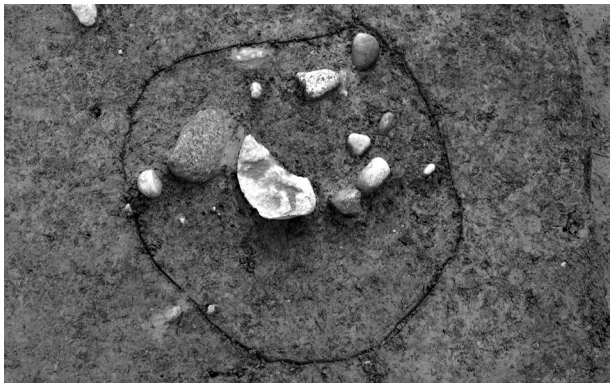
礎石跡46　検出状況（北から）



礎石跡47　検出状況（北から）



礎石跡48　検出状況（西から）



礎石跡49　検出状況（北から）

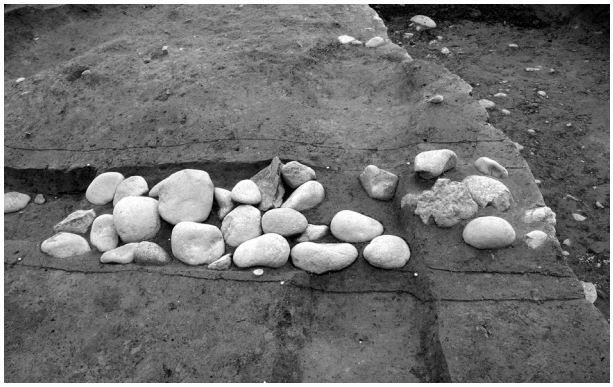
礎石跡50　検出状況（北東から）

写真図版10　１号礎石建物跡　礎石跡（３）

5号溝跡　断面状況（南東から）

6号溝跡　1区断面状況（南東から）

5号・40号溝跡　検出状況（北から）



40号溝跡　1区礫出土状況（西から）

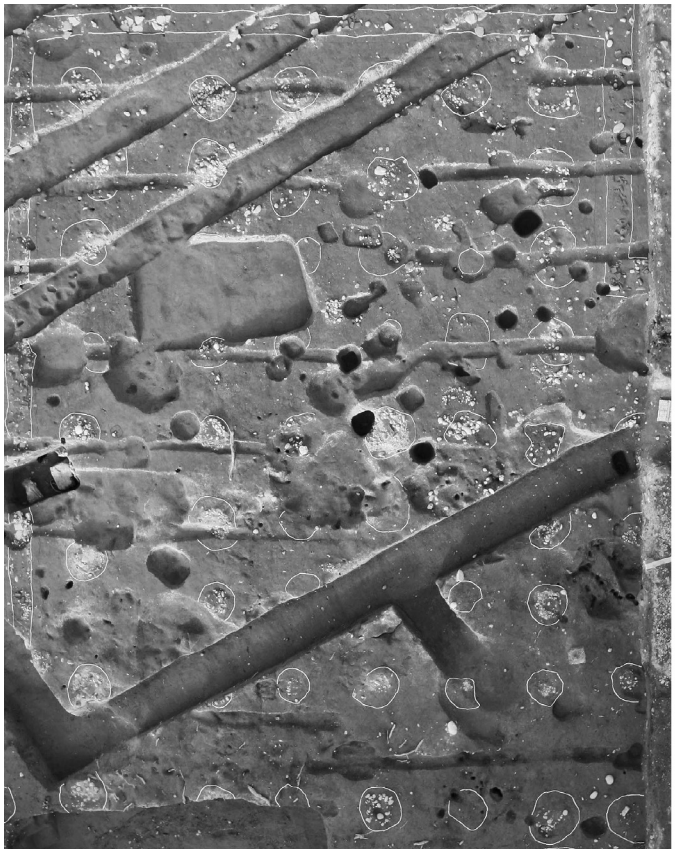
40号溝跡　1区断面状況（北から）

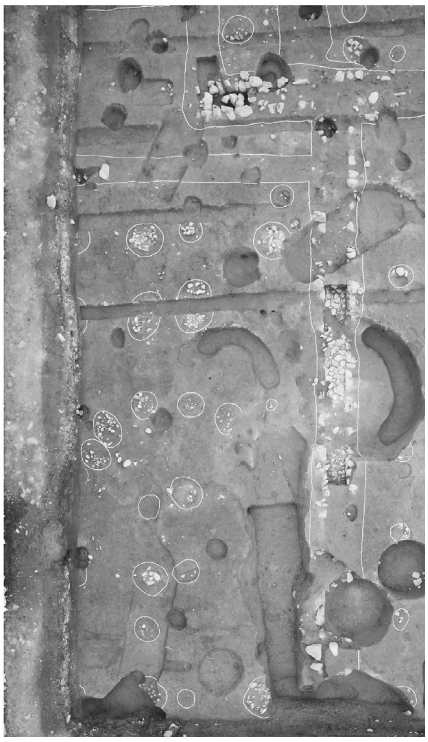
40号溝跡　2区断面状況（南から）

49号溝跡　検出状況（東から）

49号溝跡　断面状況（東から）

写真図版11　1号礎石建物跡　溝跡



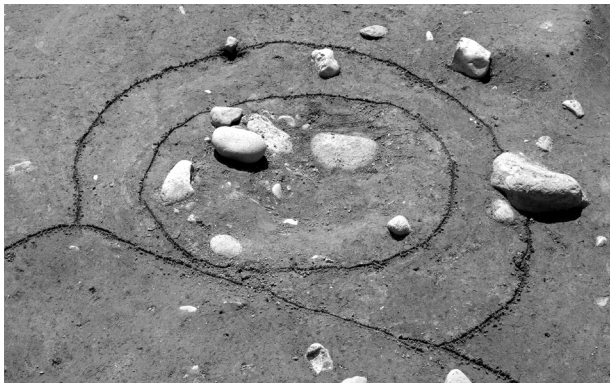


２号礎石建物跡　全景（上が北）

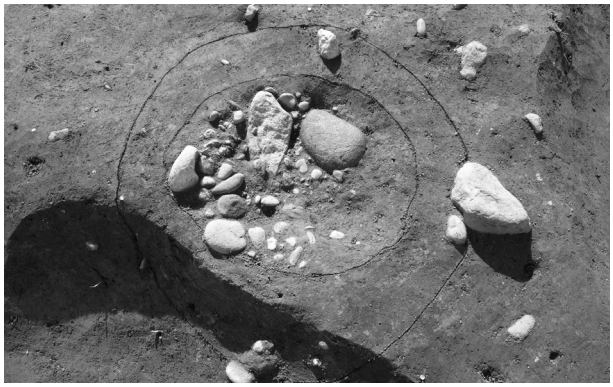
※第５次調査区（左写真）を合成

２号礎石建物跡　東端部全景（南東から）

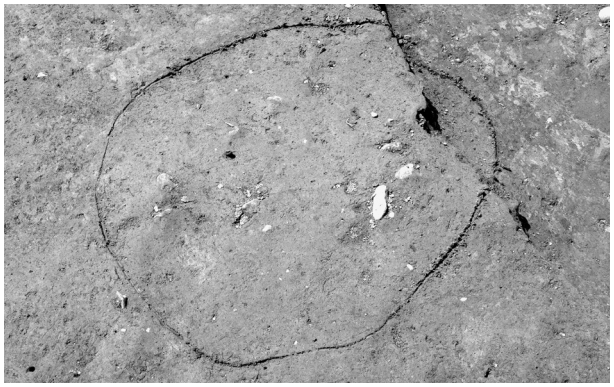
写真図版12　２号礎石建物跡



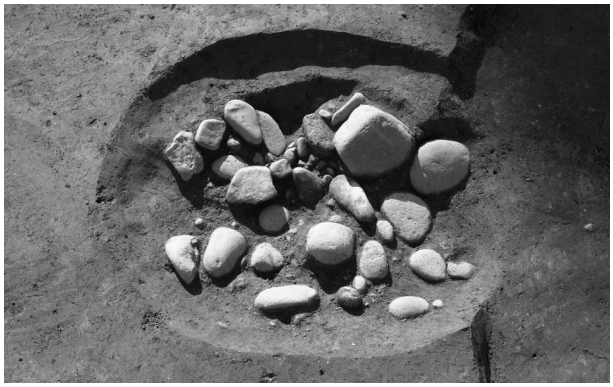
礎石跡66　検出状況（北から）



礎石跡66　掘込み状況（北から）



礎石跡69　検出状況（北東から）



礎石跡69　掘込み状況（北から）

礎石跡74　検出状況（東から）

礎石跡74　掘込み状況（東から）

礎石跡55　検出状況（東から）

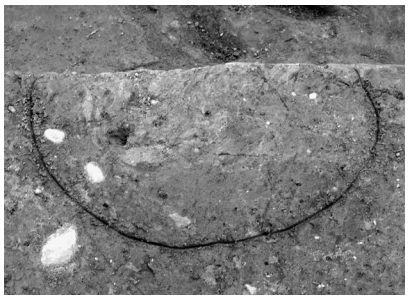
礎石跡56　検出状況（北から）

写真図版13　２号礎石建物跡　礎石跡（１）

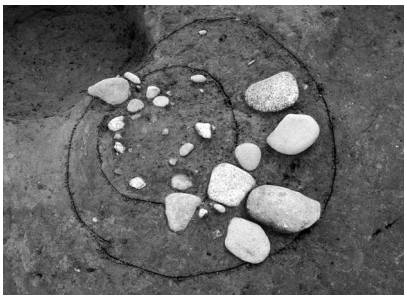
礎石跡57　検出状況（北から）

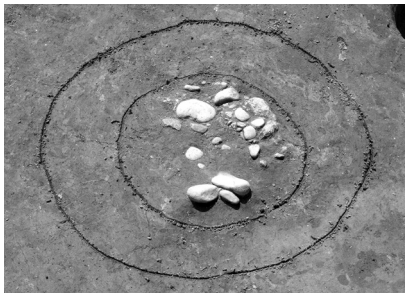
礎石跡58　検出状況（北から）

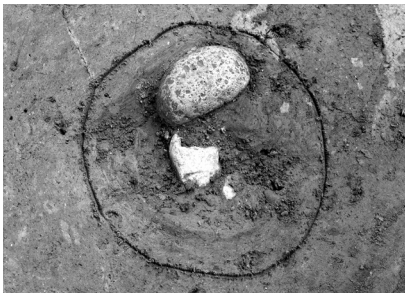
礎石跡59　検出状況（東から）

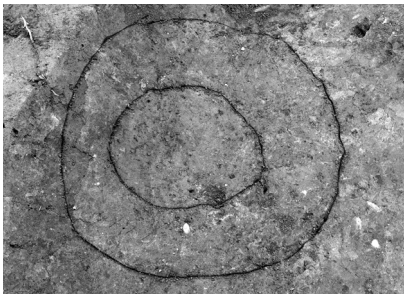

礎石跡60　検出状況（北から）

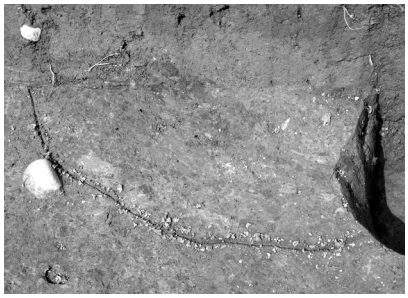
礎石跡61　検出状況（北から）

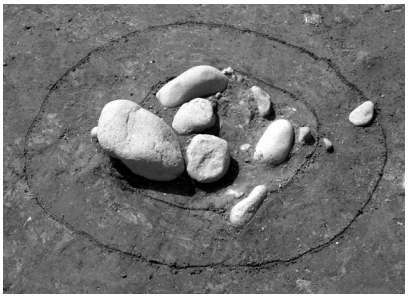

礎石跡62　検出状況（北から）

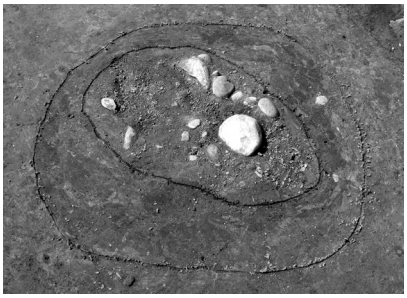

礎石跡63　検出状況（北から）


礎石跡64　検出状況（北から）


礎石跡65　検出状況（東から）

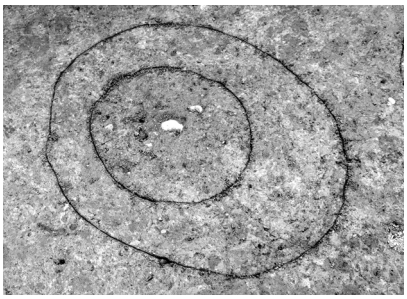

礎石跡67　検出状況（東から）


礎石跡68　検出状況（北から）


礎石跡70　検出状況（北東から）

礎石跡71　検出状況（東から）

礎石跡72　検出状況（西から）


礎石跡73　検出状況（北から）

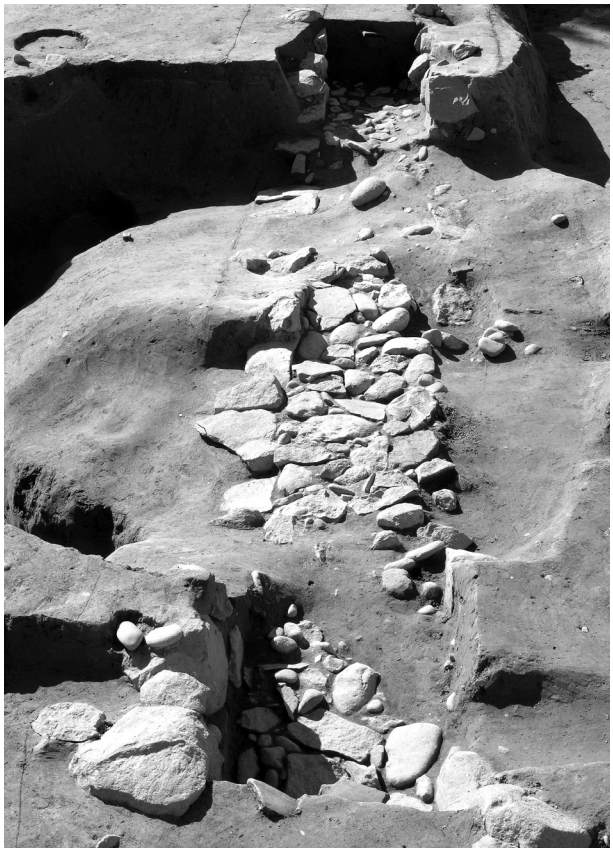
写真図版14　２号礎石建物跡　礎石跡（２）

７号溝跡　検出全景（東から）

７号溝跡　底面状況（東から）

７号溝跡　断面状況（東から）

41号溝跡　検出全景（北から）



41号溝跡　底面状況（北から）

写真図版15　２号礎石建物跡　溝跡

41号溝跡　１区掘込み状況（南から）

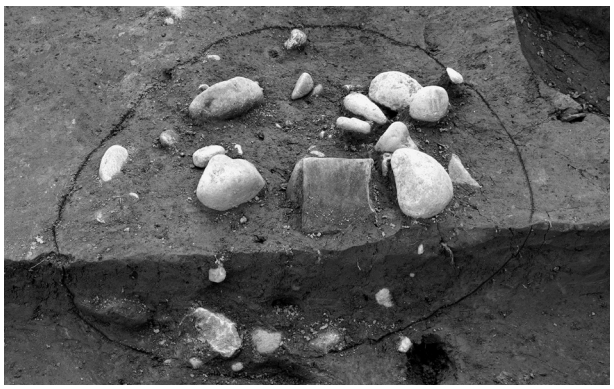
41号溝跡　１区東壁状況（西から）

41号溝跡　１区断面状況（南から）

41号溝跡　２区西壁状況（東から）

41号溝跡　２区東壁状況（北西から）

41号溝跡　２区断面状況（北から）



234号土坑　検出状況（北から）

236号土坑　検出状況（北から）

写真図版16　２号礎石建物跡　溝跡・土坑